

転生したら、女傭兵二人に迫られてる件について

門番A

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したらシエズちゃんとベレス先生が修羅場でした。

なんで？

目次

女傭兵二人に迫られてる件について

1

鼓動

12

夜明けの遭遇

19

鍛錬の一時

29

黒鷺

38

青獅子

44

金鹿

51

胎動

57

紅花の記憶 1

69

紅花の記憶 2

88

真実の記憶

112

蒼月の記憶 1

123

蒼月の記憶 2

135

女傭兵二人に迫られてる件について

唐突ですが、何故俺は今修羅場に巻き込まれているのでしょうか。

「ちよっと、何のつもり？ 灰色の悪魔って意外に節操ないのね」

左手を握られる。すつごく力入ってて痛いです。後何か、変身してるね貴方。

「彼の面倒は私が見る。キミじゃ力不足だよ」

右手を握られる。こつちもめつちや力入ってる。後、何か視界がチカチカしてるんだけど貴方も何か力使ってない？

「……」

俺の前には、二人の女傭兵がいる。

紫色の長髪が特徴的な女性のシエズ——記憶喪失も同然だった俺を拾ってくれてベルラン傭兵団で面倒を見てくれた人。料理も振舞ってくれたり色々世話を焼いてくれたりと頭は上がらないのだが何かと距離が近い。後、胸の部分の露出結構凄いで正面から堂々と覗き込むの辞めてもらっていいですか？

緑色の髪で無機質な表情が特徴的な女性のベレス——ベルラン傭兵団が壊滅した時、

何故か俺を狙いに来て、あのままどこかへ連れ去ろうとしてきた。そこに駆け付けたシエズとバチバチにやりあい―ちなみに俺も加勢したけど、普通にボコられた―そこから二度三度激突している。

「……あの」

「ウイルはそこにいなさい」

「貴方はそこにいて」

ちなみにウイルとは今の俺の名前です。ベルラン団長がつけてくれました。

正直言うとなんで二人がこんな険悪なのか分からないんだよなあ……。特にベレス先生がやたらと構ってくる理由が分からん。

ねえ、俺ただの傭兵崩れだよ？ そりゃ、この世界がファイアーエムブレムの世界だつてことを知つててそこそこやったぐらいの前世しかない一般人だよ？

結局人を殺す事に決意を持ってなくて、格闘だつたり特注の棒で殴り倒してるだけの軟弱者よ？

「――」

「――」

聞こえてくる声を聞き流しながら、今までの記憶を振り返る。

俺の知ってる風花雪月とは、大きく離れてしまったと思いつつながら。

「——ウイル、起きてる?」

「うん、まあ一応」

眠気に抗い、重い瞼を開く。気怠さも残る眠気も毎度の事だが、この体はハイスペツクな癖して、こういう所は妙にポンコツなのだ。

目を擦ると、目に映るのは紫の髪。

「……ちよつと、大丈夫? 私の名前言える?」

「シエズでしょ。大丈夫だって、まだそんな年じゃない」

「放つといたら野垂れ死にそうな光景が目には浮かぶわ。まだまだ甘えておきなさい」

三食作つてくれる人のどこを、これ以上甘えろと言うのか。

まあ、それはさておきとしてそういうええば今から仕事だったと思ひ出す。

「……ねえ、本当に大丈夫? 酷くうなされてたわ。今までよりもずつと」

「そんなに?」

「そんなによ」

確かに最悪な夢を見る事はある。

森の中で誰かが倒れる夢、血塗れの夢、悲鳴飛び交う夢——人々が死ぬ光景。だからいつも寝起きは最悪だ。

思い当たる節は無いけれど、もしかするとそういう光景をどこかで見たのかもしれない。

——そこまで考えたところで、額を小突かれる。

「相手はジェラルト傭兵団なんだから、休める時に休んでおかないと」

「……」

ジェラルト——その名前が何を意味するのかなんて、言うまでも無い。

主人公であるベレト或いはベレスの父親。そして類まれな実力故に本編途中で暗殺された人。

この世界で傭兵家業を始めて、猶更あの人の凄さを思い知る。もう伝説よ、伝説。

「何、弱気になってるのよ、気合入れなさい。貴方はベルラン傭兵団の切り札なんだから」

「買いかぶりすぎだつてば」

シエズから渡された鉄製の棒を受け取る。うん、剣や槍よりもコイツの方が躊躇なく振るえる。

殴る蹴る用の手甲や足甲も問題ない。

これなら多分あの人達相手でも一分は持つ。後は知らん。「さ、行きましよう。大丈夫よ、ウィル。私がずっと傍にいてあげる」

優しく微笑む彼女の手に引かれて、今回の戦場へ向かう。

ああ、やだなあ。戦いたくないなあ、殺したくないなあ。もう血を見たくない。

死にたくない。

ジェラルト傭兵団は圧倒的だった。瞬く間にベルラン傭兵団は蹴散らされ、壊滅した。

残るはシエズと俺だけ。

片膝を着く彼女を背後に、棒を構え神経を研ぎ澄ます。

「中々やるじゃねえか坊主。若いのに大した腕だ」

「……そいつはどうも」

やべえ、ジェラルトさんクツソ強い。

一撃受けるだけでも、体ごと持っていかれそうな衝撃が走るって言うのにそれが連発してくるんだもん。

そりゃ、やみうごさんも暗殺に走るわ。正面から挑んでも勝てねえよこの人。さつきから全神経集中させてるのに防戦一方。どうしろって言うんだこれ。

「だがどうにも妙だな、お前さん……どっかでやりあつた事あるか？ 俺の槍を、分かつてるように受けやがる」

知りませんよそんなの。こっちは生きるのに必死なんすよ。

そう考えた時、ふと——空気が凍えたような錯覚を覚えた。

「——変わる。彼は私が引き受ける」

黒髪、見覚えのある服、変わりの乏しい表情。

ベレス・アイスナー——本編主人公が出てきやがった。

嘘やん、ジエラルトさん一人もキツいって言うのにこっからベレス先生も来るのかよマジかよ。

「おいおい、向こうは終わったのか」

「終わらせてきた。それよりもジエラルト。」

早く変わって欲しい」

ベレス先生、やる気満々です終わりました俺。

ああ、でもどうにかしてシエズだけでも逃がさないと。

「……そうか、その坊主は中々やる。油断するなよ」

「知っている」

去つていくジエラルトさん。

さて、ここからどうしたら生存ルートに行けるかな。

「……」

「——」

ベレス先生は構えない。けれど、油断はしない。

相手は主人公であるからと言って、俺を殺さない理由など無いのだ。ましてや生徒と戦うこの世界なら、至極当然の話である。

「……ああ、やつと」

「……う？」

何故か歩いてくる。殺意も何もない。

ただ俺を見つめながら少しずつ。

どうするべきか、どう対処するかを考えてる間に気が付けば手が届く距離まで近づいていた。

「……キミはいつも変わらないね」

「へ？」

「大丈夫、今度こそ救う。何としてでもキミとの未来を掴んで見せる」

頬に手を伸ばされる。

え、ちよつと待つて顔近い。めつちやキレイ。

ねえ、ベレス先生何で俺の首に顔を近づけて――。

「――女の匂いがする」

「はい？」

「私以外の女と寝たの？ 答えて」

「え、ちよつ」

「答えて」

何で浮気バレたみたいな会話になつてゐるんすかコレ。

途端、ベレス先生の殺意が背後へ向いた事を察した。

「ああ、その女だね。許せないな」

「！」

今、言葉の内容や経緯はどうでもよい。彼女の敵意がシエズに向いた。

マズい、それはマズい。目の前で恩人を殺される事だけは看過できない。

「何で、庇うの？」

「恩人だからですよ。殺される訳にはいかないんです」

見えたのは崖。確か下には川が流れている事を思い出した。そこその深さはあつ

た気がする。

シエズはまだ満身創痍。ベレス先生は戦つてすらいない。加えて、俺程度の腕で勝てる筈もない。

ならばやるしかないだろう。

「！」

「抱えるぞ！」

咄嗟に離れて、シエズを抱えた。そのまま崖目がけて走る。

先ほどまで彼女がいた場所の地面が、砕かれた音がする。

「ウイル、何を」

「ごめん、これしか浮かばなかった」

彼女を強く抱きしめて、崖から飛び降りる。

川の激流に体が流されていく——そこで意識は閉ざされた。

ああ、はいそんな事もありましたね。

それから何故かシエズが覚醒して変身みたいになって俺を川から救つてくれて看病までしてくれましたね。

そこから急に彼女の独り言が聞こえてきたけど、多分あれだなあ。ソティス見えてる先生と同じ現象起きてるのかな。

シエズにベレス先生との関係を聞かれたりーマジで身に覚えがないのを説明して納得してもらうまで半日かかったー、彼女と修行の日々を送りながら傭兵家業で食いつないだり。

そうして、士官学校の級長三人と出会って。士官学生になって……。それで、戦争が起きたりして。

目まぐるしい日々だったのだ。激動の日々だったのだ。

そうして、またジェラルト傭兵団と何度か激突して。シエズとベレス先生が本気の殺し合いをする中で、どっちも死なせたたくない俺は何とかして誤魔化し誤魔化し立ち回って。

やっと、陣営にベレス先生とジェラルトさんが来てくれて。

——今に至る。至るのだけれど、ベレス先生がイメージとほぼ違う。

「ウイル、教えて欲しい事は無い？ 何でもいいよ、訓練なら付き合おう。お茶でも雑談でも遠乗りでも構わない。」

寧ろ行こう。時間ならいくらでも作るよ」

めっちゃ俺に構ってくるやん、支援会話埋めたいって思うぐらい迫ってくるやん。

「ウイル、私が先約でしょ？ 前々から言ってたけど？」

いや、それ多分ルーチンのアレなんすよ。

ああ、今日も女傭兵二人が迫ってくる。

なんで？

そして私は、水面に沈む小さな蛹の夢を見る。

鼓動

父が少年を拾ってきた。乾いた血があちこちにこびり付いていて、目には光が無い子どもだった。

怯えたような目が酷く印象に残る。

「林の中にいてよ。どうにも見過ごすのも気分が悪いもんでな」

「どうするの?」

「そりや……どこかの村に預けでもするか、孤児院に引き渡すかだろ。俺達は教会じゃないからな」

一晚、夜を明かし少年は不思議と傭兵団に馴染んだ。

武器の整備、道具の補充など細やかな所に気の利く人物であり、瞬く間にその空気に溶け込んでいく。

そして意外にも武の才能もあった。

団員の一人が戯れ程度に槍を教えたところ、その動きを瞬時に吸収し自分の物として

いった。それを見た者達が次々と先輩風を吹かして教えていく。

そしてジエラルトもその一人だった。普段なら教え無さそうだが、酒に酔った彼はついでに手が軽くなり自身の槍を教えた。

父が教えた技は、私が三ヶ月かけてようやく覚えたモノ。

それを少年は僅か数分で不完全ながら模倣した。教えた本人ですら驚き「後は経験さえ積めば、モノになる」と認めるので。

「——っ」

胸に感じたのは激しい感情。負けたくない、追い越されたくない。

後になって知ったが、それを嫉妬と言うらしい。

「勝負して」

「？」

感情の動くがままに、私は彼に勝負を申し込んだ。後先何も考えない傭兵らしからぬ行動であったとは思ふ。

父や周りが思わず目を丸くしてしまう程に珍しい出来事だった。

「……分かった」

そうして始まった勝負。

私と彼の技は、互角。一時間経つても決着はつかず。酒のつまみ程度に眺めていた傭

兵達は思わず息を呑むのを忘れていたと語っていた。

最終的には殺し合いになりかけたところを、二人とも父に氣絶させられた。

これは彼との記憶。

私が決して忘れる事のない彼との始まりの思い出。

『……もう、良いのではないか』

「よくない」

眼前に広がるのは彼女との世界。

心の中で初めて少女と出会い、話す時はいつもここにいた。

彼女は玉座に座るのではなく、私の前に立って呼びかけていた。

『お主は充分足掻いたであろう。それでも、あやつの運命は覆らぬ。如何なる運命を辿り、因果を追ったとしても……お主の見てきたままじゃ。』

奇跡の代償ならば、もう良いではないか……！ 何故、お主が苦しまねばならぬ！

誰も、誰も覚えておらぬ！ お主の苦しみも、覚悟も、記憶も、決意も、その果てに磨り潰した煩悶も！ 悪魔だの何だの罵られなければならぬのじゃ！』

「私自身が望んだ事だからだよ、ソテイス」

一度目——彼は気が付けば消えていた。戦いの後、探しても見つかる事は無く。その消息が分かったのは、闇に蠢く者との戦いが終わった後だった。

二度目——彼を目の前で連れていかれた。そのまま追跡し、本拠地まで探し当てて彼の下へ向かった。彼の末路を、倒した敵の頭領から聞いた。

三度目——彼が連れていかれるのを阻止した。そうして闇に蠢く者との戦いで、私達は罠にかかった。彼は、その罠から私達を救うために消失した。

四度目、五度目、六度目——救えない。

悉く、私は彼を救えなかった。

彼のいない世界は、陽が差さないも同然だった。それでも自身が選んだ道の責任を全うするために、出来る限りの事をやり切り、次の道の為に答えを探した。

幸い、ソティスが消える事無く最後までいてくれたのは大きかったと思う。

独りは、さすがに堪えただろう。存在が大きかった父は、私を五年間守り続けてくれた後眠るように息を引き取ったから。

『馬鹿者……！　それが答えになるか！』

「私にとつては答えなんだよ」

繰り返し続ける運命。その重さすら忘れてしまうほど。

あの士官学校での日々は、とても楽しかったのだ。今でも鮮明に思い出せる程に、あ

の毎日は彩りに溢れていて。

彼がいて、父がいて、級長の三人がいて、生徒達がいて、教師達がいて。

——その笑顔は、皆眩しくて。

『そんな……そんな答えで納得するか、馬鹿者めが……!』

「ごめん」

『……良い。ベレス、農から一つ提案がある』

「提案?」

珍しい話ではない。彼女はこう見えて、視野が広い一面がある。

きつと、貴重な話になる。

『——次の運命では、あやつと出会うな』

「——え」

一瞬、鼓動が止まったような錯覚を覚える。

それが意味するのはつまり。

『地虫……と昔の農なら呼んでいた連中じゃが、お主が士官学校に行つてしまえば対抗出来まい。何をするにも後手になりかねん。』

あの者どもは必ずあやつと接触する。守るのが目的ならば、士官学校に向かう必要は無かるう』

「……」

一理ある。今の私では、思いもよらない意見だった。

けれど、きつと私も。そして彼女も、表情は苦しい。

『……ああ、そうじゃろう。儂とて嫌じゃ。あの日々は、あの毎日がかつての感情を忘れさせてしまう程に満ちていた。怒りすら気にならぬ程の愛しさに溢れていた』

「……うん」

彼女が何を言うかは分かる。

ああ、きつとこの選択はとてつもなくて苦しいモノになる。私の心を、酷く傷つけるモノになる。

『それでも、選ぶのかのう。かつての日々は背を向けて、運命を選択するか？』

「……少し迷った。けれど、私は行くよ」

だけど、あの日々を私がいけない事で彼を救えるのならそれでいい。

私は教師ではなく傭兵として生きる。

剣が鞘に収まるように。ただあるべきところに落ち着くだけ。

『そうか……。ならば行くとするぞ、儂とてあやつがないのは寂しいからな』

「行くう」

そうして出会ったキミは、私の事を勿論覚えていなくて。けれど、優しい瞳は変わらず。その佇まいも、雰囲気も、何もかも私の知っている彼と変わらない。

強いて言うなら、ある女の匂いが染み付いている事だけが気にかかるけど、そんなものは私で打ち消してしまえばいい。

——そうして、また始まった彼との日々。

私の知らない彼ら、私の知らない彼女達。知らない笑顔、知らない生、知らない道。

ねえ。

キミは、私が先生じゃない方が幸せだった？

夜明けの遭遇

「こつちだと思ふのよね。山超えたら近いし」

「方角違ふと思ふしそもそも何で、山を通る前提になるの……？」

『うん、それは僕も言いたかった』

シエズと共に大修道院への帰路に着いていたが、やはり彼女の無鉄砲さは結構ヤバイ。

山超えるわ、魔獣と出会うわ、何かはぐれ盗賊みたいのおるわーゲーヘツヘツと笑つてたから、念入りにシバき倒しといた―それだけで一つの課題みたいなレベルだった。

で……何かまた遠くから喧騒聞こえるんだけど何だこれ。

「……！ 人の声ね、やっぱりこつちで会つてるわよ」

「シエズ、一人だと絶対野垂れ死ぬタイプでしょ」

『キミと彼、どつちも孤立したら死ぬと思うよ？』

見えるのは、訓練用の武器を持って戦う生徒達の姿。

あー、そうだ。今日そういうえば学級対抗戦の日だったわ。

……え、もしかして戦場に迷い込んだ感じなのこれ。

「——前向きに行きましよう。全員倒して、一緒に帰ったら解決よ」

「脳筋思考やめない？」

確かに色々と苦労はある。でもどうしてか。

彼女と共にいる時間は、悪くないと思うのだ。

「鬼が出る？」

ゲッツの言葉を、シエズはそのまま返答にした。

次の依頼はある盗賊団の殲滅——根城は突き止め、強襲を仕掛ける事となった。その前日、作戦を各々で確認し合っている時、彼がそう呟いたのである。

「ああ、そうだ。何でも、化け物みたいに強いヤツが彷徨ってるらしくてな。最後にいとされるのが、その近辺らしいぜ」

「何で、それが分かるのよ」

「鬼退治とやらを任された傭兵団が全員、一蹴されたとかだそうだ。相手が殺す気なら

全滅していたとか言ってたぜ」

「あー、それ私も聞いた事ありますよ」

ゲツツだけならともかく、リザリまでが言うのなら間違いはないのだろう。

「鬼に会ったと思つたら、仏心に会つたつて訳ね。……ホントかどうかはともかく興味はあるけど」

シエズとて傭兵であるが、時折手合わせもしたくなる一面もある。

ベルラン傭兵団は、皆が気のいい者ではあるが傭兵としてはそこまで強く名が知れる訳ではない。

「お前ら、早く寝な！ 明日は、忙しくなるぞ！」

ベルラン団長の声で噂話に興じていた者達は、蜘蛛の子を散らすように自分の寢床へ着く。

この傭兵団のいつもの光景だった。まるで酒場の一部分を切り取ったかのような空気が、ただただ心地よい。

——そうして翌日、件の盗賊団の根城へ向かった。

転がっていたのは、痛みに呻く盗賊達。

「なんだ、こりゃ……」

「あの噂は本当だったつて事ですかね」

「とりあえずこの頭領を探しな」

ベルラン団長の指示に従い、盗賊達の捕縛を任せてこれをした人物の搜索に向かう。シエズが向かったのは、根城の奥。かつては教会として使われていたであろう建物だった。三階は吹き抜けになっており、そこから村を一望できる。

見栄張りの頭は、こういった場所を好むものだと言われた。そしてそれを裏付けるかのように転がっている盗賊の数が多くなっていく。

「これ……もしかして一人でやったって事？」

倒れている盗賊達の各部位には、殴打されたような痕だけがあり斬撃や刺突と言った刃の類の傷は無い。同じ武器で攻撃されたとしか考えられなかった。

階段を奥まで上がっていくとテラスがあり、頭領らしき男が胸を潰されて転がっていた。見ただけで即死だと分かる。

その壁——部屋の奥の壁に背中を預けて誰かが座っていた。

「誰？」

夜明けの光が差し込んで、その人物を照らし出すも顔は輪郭程度しか見えない。

右手には多量の血が付いた鉄の棒、服や顔は返り血で塗れていて元の色をほとんど留めていないように見えた。

「……誰か、いるのか」

若い少年の声だった。

目には生気がなくまるで幽鬼のようで、果たせぬ想いを抱いて戦場に転がる戦士の骸の如く。

——そんな彼を見た時、酷く胸が搔き鳴らされるような感覚があった。彼が運命を共にする存在なのだと言わんばかりの感情だった。

「私はシエズ。ベルラン傭兵団の一人よ」

「傭兵……？ 俺を、殺しに来たのか」

「だったら、とつくに斬りかかってるわよ。ほら、立てる？」

少年に手を差し伸べる。

彼は、それを見てから僅かに視線を背ける。まるで、眩しいと言わんばかりに。

それだけで彼がどのような生きてきたのかを、悟ってしまう。

「……貴方は」

「何？」

「貴方は……俺が恐ろしくないのか」

「……何が恐ろしいのか、分からないわ。寧ろ放っておけないって言うの？ そんな力

ンジよ」

少年は、伸ばしかけた手を一度止めて。僅かな時の後にもう一度その手を掴んだ。

弱々しい子どものような力だった。

「さ、行きましょう。皆に貴方を紹介しなくちゃ」

彼の手を引いて階段を下りる。

言葉は無かったけれど、彼が困惑しているという事は分かった。けれど嫌がっている訳では無さそうさだ。

「シエズー！ 遅いぞー！」

「皆待つてますよー」

「……？ 何だ、その少年。捕らわれてたのか」

待つていた傭兵団の面々に思わず、息が零れてしまう。

この何とも言えない空気が、シエズはとても心地良かった。

「逆よ逆。彼がここの片付けしてくれてたのよ」

「ホントかよ？ ……つて事はコイツが噂のヤツか！」

「噂……？」

「めちやくちや強いヤツがいるつて事。あんまり気にしないでいいわ」

「………そうか」

一瞬で彼は注目の的になる。血塗れだろうが何だろうが、傭兵にはなんて無い事だ。

この空気に慣れてないのか、少年は戸惑ったような反応をしていた。

「ところでアンタ、名前は？」

「名前……」

「なるほど、訳アリって事か。……じゃあそうだな、ウイルって名前はどうか？」

「ウイル……」

「あ、団長抜け駆けずるいですよー！」

「うるさいね。言い出したモン、早いモン勝ちに決まってるだろう」

眼前で行われる些細な口論。けれど内容は肩の力が抜けてしまうモノばかりで。

——ほんの少しだけ、彼の口元が小さく笑んだ。

「何よ、ちゃんと出来るじゃない」

「……出来なかった訳じゃない」

このまま共に過ごしていけば、彼は本来の自分を取り戻していくだろう。

彼にとつて、この傭兵団の空気は悪い物では無さそうなのは幸いだつた。

「よっしゃ、お前ら！ ウイルの歓迎会だ！ さつさと戻って宴と行くぞー！」

「ウイル、傭兵やる上での俺の経験談教えてやるよ」

「ちよつと、ゲッツ。先輩風吹かせるのはいいですけど、傭兵は戦果が全てですからね」

「わ、分かっているって」

下らない事を話しながら帰り路を歩く。共に生きていなければ出来ない一時。

どうかこの場所が、彼の縁となりますように。

そんな彼との出会いを思い出しながら、眼前に迫る敵を斬る。無論、真剣ではなく訓練用の剣だ。

赤、青、黄と言ったそれぞれの兵が眼前に集いこちらを狙ってくる光景は中々に経験できないだろう。

背後を守ってくれる相棒の奮戦を感じながら、剣を握り直す。敵の中になだれ込み、瞬く間に蹴散らしていく様子は、夜を裂く暁風のように。

『随分と余裕じゃないかシエズ』

「そりゃまあ。頼もしい相棒がいてくれるから、余裕もあるわよ」

脳内に聞こえる彼の声に、小さく返答する。

別に周りに聞こえるのは構わないが彼に聞こえて変人扱いされるのは嫌だった。そんな事されたら三日三晩寝込む自信がある。

『確かに、彼はとても強い。キミと二人がかりなら灰色の悪魔を倒せるんじゃないか？』
「その前に彼とどういう関係なのか根掘り葉掘り聞いたからだけど。あの反応を見るからに他人ってワケじゃなさそうだし」

あの遭遇の後、関係を尋ねたが知らないとしか言わなかった。彼が器用な嘘をつける性格ではないのは知っていたが、収まりが悪い。何故か、あの女に彼の事で負けるのだけは嫌だった。

『相手が逃げていくね。ここは制圧したようだ』

辺りはどうやら制圧したらしい。敵だった生徒は本陣へ引き返していく。

「シエズ、まだ行く……？」

「ええ、勿論。誤解つて事をちゃんと説明しなきゃ」

『誤解も何も、三学級を薙ぎ倒している時点で弁明のしようが無い気がするけどね』

「ええ……」

ベルラン傭兵団はもう無いが、その時の思い出の一つ一つは確かにここにある。そしてそれを共に振り返る相手もいる。

思う所が無い訳では無いが、未練背中自体は無かった。

「さ、行くわよウイル。貴方の一生背中を守るのは私なんだから」

「今、何か違つたニユアンスがあつたような……」

『キミも苦勞しているんだね、ウイル……』

“でもね、シエズ。彼を他人ではないと思うのは僕も一緒なんだよ。彼には、キミと違った共同体のようなモノを感じるんだ”

鍛錬の一時

「ウイル」

「ベレスさん、どうかしたんです?」

ある日、闇に蠢く者の追討作戦に参加した後の事だった。

天帝の剣を持っていないこの人の姿を見るのはやっぱり慣れないと思う。

「追討戦に参加したと聞いたけど、特に何もなかった?」

「ええ、まあ。……特に何もなかったですね、強いて言えば一緒に参加した人が頼もしくて俺はほとんど露払いみたいなモンでしたけど」

「何か言われなかった?」

「いや、何も……」

ベレス先生の目はいつになく真剣である。何かあったのだろうか。

多分シナリオの雰囲気的に中盤へ差し掛かった頃なのだろうけれど。

確かに大分展開違うもんなあ。三学級合同で参加してるし。何かやみうごさん、普通

に魔獣放ちまくってるし。

「ならいい。ちよつと気になっただけだったから。」

時間があつたら食事でもどうかかな？」

「俺なんかで良ければ」

「キミがいいんだ」

この先生、やつぱりぶつけてくる感情重すぎない？

まだ出会つてから二週間経つてないと言うのに、距離が近い。この前何て、教えても無いのに天幕の寢床まで来てたのはびっくりした。何か大事なものを無くす寸前だった。

いや嬉しいよ？ 嬉しいんだけどさ、思い当たるフシが無すぎて複雑なのよ？

「さあ、食べよう」

「はい、頂きます」

ちなみに俺が注文しようとしたのは全て、ベレス先生が先に注文してました。

怖いつて。何で、俺の好物把握してるんすか。

「それにしても、キミはやはり強いね」

「まあ、何ですかね。勝手に体が動くと言うか覚えてると言うか」

正直、それに関しては本当に謎な部分が多い。

シエズと共に学級対抗戦に乱入して三学級を全て撃破したのは、士官学生での語り草になりつつある。

正直あれは、強くニューゲームやってる気分だった。後シルヴァン、急所に棒が直撃したのは本当にすまなかった。わざとじゃなかったんだよアレは。

「そうか。なら、それはきつと鍛錬の成果だよ」

「そうなんですかね……？」

「そうだともし」

何か反則してる気分ではなかったけど……。

自然とできるようになっていた事を褒められるのは中々にむず痒い。自分の体が知らないところで知らない力を持ちだしているなんて言う事が不気味でしか無いのに。

「……よく分からない」

正直、俺の知る風花雪月とはもう勝手が違いすぎる。

エガちゃんやんが戦争仕掛ける前に、闇に蠢く者達が動き出してるし。教団もその殲滅に全力を注いでるし。そこでこんで、何か展開も色々動き出してる。

何だろううねこれ。とても嫌な予感しかしない。

「この後、訓練でもする？」

「——生憎、それは私が先約してるのよね」

ここで颯爽と俺の隣を取ってきました同僚のシエズ。

相変わらず、腕がくつつきます。パーソナルスペースなんて無いです。意味ありげな笑みを浮かべるのやめてください。

「――」

はい、火花の演出頂きました。

……どうしてこうなったのか、何故こうなったのか分からないけどさすがにここで黙ったままと言うのも情けない話である。

言うのだ、とりあえずこの先どうなるか分からないけど。とりあえず仲良くしませんかと。

「……あの、とりあえず殴り合いませんか？」

「え？」

「は？」

一時間前の俺、マジで馬鹿。本当に馬鹿。救いようの無い程に馬鹿。何で仲良くしましょうと言おうとして、殴り合おうが出てくるんだよ。

そしてき——

「キミとの訓練は楽しみだね。フォローは任せて」

「貴方と組むのは初めてだけど、意外に行けそうじゃない。今日は勝たせてもらおうわよ
ウイル」

ねえ、何で二人がタッグ組む事になったん？

ベレス先生は言うまでも無いけど、シエズは普通におかしい。何で目の前に剣振つてるのに真横から斬撃飛んできてるんだよおかしいだろアレーフェリクスが再現しよう
と頑張つてたけどどう足掻いても無理だと思ふの——。

いや、よく考えたら先生もおかしいわ。戦場で兵士めつちや薙ぎ払うし、地水火風の魔法が来るしで敵対関係にあつた時はやばかった。ベレス先生来たら、何故か俺とシエズが駆り出されてた。

そして今回はそのシエズも敵である。ギャラリーも止めてくれや真面目に。俺、普通に死ぬやん。

「彼と二人の手合わせでしょ？ 興味あるに決まつてるじゃない」

「ああ、俺も同じだ。こんな光景を見逃すなど、騎士の名折れだからな」

「個人的な興味としては凄く惹かれてね。矛と矛がぶつかりあつたらどうなるかなんて、気になるに決まつてるだろ？」

エガちゃんもデイミトリもクロードもなに面白い顔してんの？ 後の五年間もそのままできてくれよ。

「ベレスー！ シエズー！ 頑張れー！」

「ウィルー！ 負けるんじゃないぞ！ 男の意地見せてやれ！」

「お前の勝ちに全て賭けたんだ、頼むぜ！」

楽しそうだねキミ達。

賭けたやつ覚えとけよ。後で夕食に辛子を山ほど入れてやるから。

「……」

ああ、クソ。こうなったら腹括るしかない。

やってやるよ！

さあ持つてくれよ俺の体ア！

シエズはいけましたが、先生にはあと一步届きませんでしたチクチヨウ。

我ながら初見殺しもいいレベルの白兵戦ですら、見切られてました。あの人、強すぎない？

やはり強くなつていたと高ぶる心を抑えつける。

帝国のベルグリーズ伯と同盟のホルストから仕込まれ最早二人に並んだと呼んでも過言ではない白兵戦、王国の蒼獅子部隊の目標かつ模範も同然であつた槍術。まだこの世界では見てはいないが、劍術も恐らく私の知つていた彼に並ぶ筈だ。

「やつぱり強いですね……動きに粗があつたかなあ」

「あれで粗なんてある筈ないじゃない……」

訓練の振り返りを食堂で行う。

——とは言つても、私がやつていたのはズルに近い。

彼の動きを私が忘れる筈もないのだから。

それでありながら、二人がかりで押されていたのはやはりさすがと言わざるを得ない。

「にしても強いですね……。ネメシスとかと戦つても勝てるんじゃないんですか？」

「ネメシスつて言うത്英雄戦争のよね？ まさか、死人が蘇るワケないじゃない」

ネメシス——確かエーデルガルトから聞いた話だ。

生憎、あまり興味はない。

そもそも会つた事も無い伝承の人物に、そこまで思わない。

「まあ、そりやそうだけど……。ああ、でも悔しいなさすがに」

「今日私達が勝てたのはたまたま運が良かっただけだよ」

「運も実力が伴って初めて拾えるモンですよ。負けは負けですよ」

ああ、そうだった。彼の口癖だ。

一度追い詰められた彼から吐き出された本音を思い出す。

『俺は、自分が嫌いですよ。終わりの運命を知っておきながら、それを許容した。消えていく命が目の前にある事を知りながら、それでも見なかつた事にしようとする自分が心の奥底から一番憎いんです』

違う、そんな事は無い。それでもキミは私と共に行くと言ってくれた。

『——死ぬのが、怖かつたからですよ』

違う違う違う。

キミが恐れているのはそれじゃない。

自分の死を恐れる者が、最期に笑って消えていく筈が無いのだ。

だから私は——

「ベレスさん？」

「……ああ、ごめん。少し考え事をしていた」

「大丈夫ですか？　もしかして打ち所が悪かつたとか……」

少し顔を慌てさせる彼。

思わず頬を緩めてしまう。

大丈夫だ、今度こそ救う。今度こそ助ける。今度こそ終わらせる。

英雄の遺産なんてモノに、キミを奪わせたりはしない。

黒鷲

「ねえ、ウイル。今いいかしら？」

「うえつ、何でしょうかエーデルガルト様……？ 殿下？ 皇帝……？」

「今はただの士官学生よ。貴方と同じ立場なんだからかしこまらないで。自然体でいて頂戴」

武器の手入れをしてたら、突然後ろからエガちゃんに話しかけられて変な声を上げてしまった。

今まで何度か共闘した事あるから、初めましてではないけれどさすがに級長と話すのは緊張する。後、クロードとかは何を考えているか分からないからどこか苦手。

不思議とデイミトリはそうでもないんだけどなあ……。

「単刀直入に聞くけれど貴方とシエズ。帝国で腕を振るつてみる気はないかしら？」

「……随分直球ですね」

「それだけ真剣に考えてるのよ」

エーデルガルト——風花雪月において重要となる人物。彼女の一声で帝国は戦争を

宣言しフオドラに混乱を齎す事となり、多くの悲劇が起こる。

今の段階で彼女がどう考えているかは分からないけれど、そう遠く無いうちに決起するのは違うと思う。彼女の壊したいモノが自然に消滅しない限り。

「ええと、お声を掛けて頂いたのは有難いんですけど……俺戦う事しか出来ない人間ですよ。」

そんな人間が必要になる未来が来るって事ですか」

少し遠回しに。けれど彼女の心を探れるように。

「……ええ、念には念を入れておきたいの。帝国の中には不穏分子も多い。内乱なんて充分に起こり得る状況よ」

「なるほど、それで」

「答えは……今すぐ聞くつもりはないわ」

話していて感じるののは芯の強さ。そして微かな不安。

彼女の過去は紋章の実験による悲劇。文章でしか語られていないが、生き物としての尊厳を全て踏み躪られる程の屈辱があったのだろう。

故に目指すのは犠牲となった者達に報いるための世界。自身が諦めてしまえば、彼女の死は歴史の闇に葬られ、忘れ去られてしまう。

亡くなった人達の想いや無念が、誰にも覚えられないまま世界や記憶から消えていく

事。それこそが彼女の最も許せなかった事。

確かに彼女は戦争を起こした張本人だ。それは紛れも無い事実である。

でも、ただ戦争を起こしたいただけの人物が五年後の再会を言葉にして願うのだろうか。一人でいる事に不安を覚え、導いてくれる者を慕うだろうか。

「いつか聞かせて頂戴。貴方の返事をね」

「……また時が来たら」

去つていく彼女を見送る。

もし未来が違えば、彼女の学級で共に歩む景色も在り得たのだろうか。

——背後から迫る殺気を見なかつた事にしてそんな事を考える。

「ウイル……浮気？」

「話、聞かせてもらうわね」

いつからいたんすか、ホント。

戦いの合間、野原に転がり空を眺める。星の数を数えて眠り、草原を駆ける風で目を覚ます。

そんな時間が堪らなく好きだった。

俺と言う異物があるのは何処まで行っても変わりがない。非現実、夢の中——俺が知るゲームの世界に自分がいるなんて事実が未だに受け入れがたいからだ。

そして過去に人を殺した。自らの手で人の命を刈った。思い出すだけで心の中がぐちゃぐちゃになりそうになる。

分かっている。分かっているのだ。割り切るしかない。

“こんなんでよく傭兵とかやれたもんだよなあ”

傭兵でありながら自身は死なず殺さずを謳う。

自分だけが、綺麗なままの手でいたいと願う。

共に戦い、共に生きる。けれど、心は共に非ず。

そんな自分がただどこまでも偽善的で、傲慢的で。

「気持ち悪い……」

「何が？」

隣に座ってくるシエズ。マジかよ、どうやって気配消してきたん。

……そういえば彼女、戦場で普通にワープしてたな。

「……さつき食べた物が少し」

「馬鹿ね、嘘つくならもう少しマシなの考えなさいよ」

「……」

「この軍の中じゃ、結構貴方の事見てる自信あるのよ。分かるに決まってるじゃない。

貴方が戦いを嫌ってる事も、こんな何気ない時間を大切に想っている事も。

そして灰色の悪魔よりも私を好きな事も」

「ねえ最後ちよつと待って」

「……今はそういう事にしておくわ」

「あつはい」

せつかく泣きそうになってたのに、全部引つ込んだわ。

「割り切らなくてもいいでしょ。今でさえ十分無理してるんだから」

「……そう、なのか」

「重荷になるって言うなら一緒に背負うわよ、相棒だもの。独りにさせないから」

彼女の言葉に小さく息を吐いた。

少しだけ心が落ち着いたような気がする。

「そういえばさ、結局ベレスさんを倒すって事はどうなったんだ」

「その事? ……まあシヨックだったのは事実だけれど、引きずった所でベルラン団長たちが帰ってくる訳でもないし。」

傭兵ってそういうものでしょ」

「そういうもんかな」

「まあ、結局は自分が決める事なんだけど」

——ならばきつと、俺は理由を求めている。

この世界で自分が生きる理由と、その終わりについて。

級長達の願いと戦う理由。それに並びうる答えを見つけられるのだろうか。

そうでなければ俺は、彼らの隣に立つ事すら許されないと思うのだ。

青獅子

俺に過去の記憶はない。どこで生まれたのか、どうやって育ったのか、誰と共に生きたのか。

だけどずっと、心に残っている言葉はある。

“自分の意志は、自分の為に使いなさい”

今の俺を形作る言葉。今の俺を支えてくれる言葉。

それを教えてくれたのは誰だったのかは思い出せないけれど。

どこかで見たのかもしれない光景は残らなくとも、交えた言葉が響いている。だからきつと、とても大切な思い出があったのだ。

だから苦しくはない。寂しくはない。

ただ一つ苦しいと感じるのは、自分が何一つ知らぬ顔でいて大切な人が苦しんでいる事を知った時だ。

「ここまで。これ以上はさすがに怪我します」

「そうか……。もう少しぐらいできそうだと思いますが、お前がそういうなら止めましょう」

デイミトリとの訓練を終える。

何でも俺の棒術から動きを盗みたいという事で、青獅子の学級の面々が見守る中での模擬戦となった。

にしても本当に強いなあ、デイミトリ。

「手合わせ、感謝する。学級戦の時も思ったが、想像以上だ。本当の戦場で出会いたくないな」

「こちらこそ貴重な機会です。殿下と直々に手合わせ出来るなど」

「よせ、礼を言うのはこちらの方だ」

やっぱり骨の髄から王様だよ、彼。立ち振る舞いや考え方がもう為政者のソレだもん。

エガちゃんやクロードもそうなんだけど、個人的にはデイミトリが頭一つ抜けてる気がする。

狂気に駆られなければ、真面目に理想の王だと思う。

「……ところで、一つ尋ねたいんだがいいか？」

「大丈夫ですけど……何か？」

もしかして、失礼な言動とか振る舞いしてしまつてたのだろうか。

やば……後でジェラルトさんに相談しよう。

「——どこかで、会つた事ないか？ どうにも、お前の姿に既視感があつてな……」

「既視感、ですか。生憎、過去の記憶がないもので……」

俺が覚えているのは、森の中を彷徨つていた事。そこから盗賊の拠点を襲撃し、明日を生きる食い扶持を繋いでいた事。そしてベルラン傭兵団に拾われた事。

後は精々、前世の記憶ぐらい。……いや、よく生きてんなコイツ本当に。

「そう、か……。すまないな、昔の友を思い出した」

「友、ですか」

そんな人物居たっけか……。

「おい、猪。そこまでにしておけ」

「……そうだな、すまなかつたウイル」

「大丈夫です。それよりも昼食行きます？ 王国の話とか結構聞きたかつたんですよ」

「ああ、その話で良ければいくらでも」

そういう裏事情と言うか裏設定、めちやくちや気になるのよ。

デイミトリの脳裏に過ぎるのはかつての記憶。

シルヴァンの兄であるマイクランが、一人の少年を拾ってきた所からだった。

『領内を彷徨つてよ、放つておくわけにも行かねえだろ』

ポロポロの布切れを身に付けた、幼い少年であつた。紋章は見え、捨て子か何かであつたのだろう。

彼はフラルダリウス家に引き取られた。しかし兵士として鍛えるのではなく、彼の氣持ちが落ち着き行く先が定まるまでの期間であつた。

寡黙でありあまり喋らず、けれど人に無関心では無かつた。盗賊の征伐が近づけば武器の整備を行い、民の収穫が近づけば屋敷を抜け出し共に手伝つていた。

その様子にとある兵士は聞いたが、彼は首をかしげるだけで返事はせず。もしかすると彼の過去に関係があると勘ぐる者もいた。

そんな彼の行く末が定まつたのは、ある日の事。

グレンとロドリグ、ランベールと言つた面々が劍の稽古をしており、それを幼きデイミトリ達は眺めるのが好きであつた。

珍しく、彼は顔を出しており共に訓練を眺めていた。

そして訓練の合間、兵士達が訓練用の槍を組み交わしている時にソレは起こった。

『まずい……！……！　そこから離れなさい！』

弾かれた槍が手元から弾け、デイミトリ達の下へ飛来していく。

訓練用の槍とは言え、充分に重たい物は子どもへ直撃すれば命まで危うい程。

『――』

少年が、彼らの前へ入り訓練用の槍を両手で止めたのである。

無論、衝撃を殺すために槍を手にとった後は掌で一回転させていた。

まるで放たれた矢を、素手で掴んで止める様なモノ。その芸当に思わず彼らは舌を巻
き、幼き者達には眩い光景となった。

――それから、先王ランベールは彼に槍術を教え込もうとしたり、グレンは彼に劍術
の手ほどきをした。

ロドリグは彼の力にどこか疑問を感じていたからこそ、ある言葉を彼に送った。

『自分の意志は、自分の為に使いなさい。』

どうかこの先、数多の道を前にして迷わないように。

悪意の中に落とされたとしても、見失わないように。

意思を挫く訓練の最中でも、決して折れないように。

『――はい、その言葉は忘れません』

彼が珍しくそう返事をして、ロドリグは安堵した。それから、しばらくして。

グレンと共に護衛として選ばれた彼は、ダスカアの地へ先王と共に赴き——襲撃者と刺し違える形で亡くなったと聞いた。

デイミトリはその一報を、重傷を負いながらも王国へ戻った先王ランベールから聞き、ロドリグはそれを同じく傷を負ったグレンから聞いた。

それから数日後、彼らはその時の傷が原因で亡くなった。

“まさか、な”

デイミトリはウイルを見る。

少なくとも記憶の中の彼は、無表情であつたし言葉数もかなり少なかった。けれど、ウイルはよく笑いよく話す。

だからこの感覚は、生きていて欲しいと願っていた自分の幻想だろう。

でも似ていたのだ。手合わせの時に感じたモノ。体捌きや得物の使い方も。

「……う？　どうかしました」

「いや、何でもない。……ウイル」

「はい？」

「もし今の課題が終わったら、どこかで王国に来てくれないか。お前と共に見たいと思つた光景があるんだ」

故人を勝手に人と重ねるのは愚かだと思う。

だが言葉にせずにはいられなかった。

「——ええ、時期があればいつか」

もし彼と共に王国を見たのなら、もしかすると——。

金鹿

撤退していく。パルミラ軍の後ろ姿を見ながら、地面に腰を据える。

竜騎士の数、半端じゃなかったなあ……。火とか噴いてこられたら、火傷ではすまなかつたんじゃないだろうか。

「あー、疲れた……」

今回は傭兵の仕事として、パルミラ軍の撃退を手伝っていた。闇に蠢く者の追討こそしてはいたけれど、一応俺やシエズの形式上は傭兵である。

レスター諸侯同盟から依頼金を受けた以上、仕事ではあるし力になりたいと思つていた所はある。

「お疲れさん、助かったよ。お前さんのおかげで楽が出来た」

「こちらこそ、今後とも何かあれば」

ベレス先生とシエズの二人はお留守番である。さすがに修道院が襲撃される可能性

がある以上、全戦力をバルミラ軍の撃退に向かわせる訳にはいかない。

ジェラルトさんが説得してくれたおかげで助かりました本当。今度お肉奢らせてください。

「……ウイル、もし良かったら同盟に来ないか？ いい値は約束するぜ」

「雇われるって事ですか？」

「ああ、待遇もきちんと考えさせてもらうさ」

「……あー、今はちよつと保留ですかね」

今は闇に蠢く者との戦いが一段落するまでは落ち着けそうにないのだ。

気がかりな事はいくつもあるけれど、やはりベレス先生の事がどこか気になる。あの人は凶太い神経の持ち主だ。

そんな人物が、不安げな表情を隠せていない事実を笑って見過ごすなど出来ない。

シエズにそれを知られたら浮気扱いされそうだけど……。

「そうか、そいつは残念だな。お前さんとなら、いい関係を築けそうだと思ったんだが」

「まさか、どこまで行っても傭兵ですよ俺」

「そんな事大した問題じゃないさ。レスターどころかフォドラには訳ありなヤツなんて山ほどいる。

力もあつて心を許せるヤツなんて中々いないんだコレが」

いや、そんなこと言うのなら俺結構怪しい気がするんですが……。

未だに自分の強さの理由分からないし、過去の記憶も無い。言っちゃなんだが、結構不審な点が多すぎる。

こう見えて実は敵のスパイだったとか、裏切りポジションの人物なら大分へこむ自信がある。と言うか裏切れないし。

「……まあ、高く買ってくれてるって事は受け取っておきます」

「おう、頼むよ。中身がいいなら値段は二の次なタイプでね」

「不良品の可能性とてありますが」

「生憎、目には自信があるんだ」

そこまでクロードから評価高い理由は思い至らない。

多分、面白そうぐらいの理由な気がする。……でも、クロードそういうタイプじゃないような気もするんだよなあ。

マジでこの人は、よく分からん。

「さあ、帰ろうぜ相棒……はシエズと傭兵殿に殺されかねないな」

「うん、本当にやめといた方が良い」

この前、どっちがパートナーに相応かでバチバチにやり合ってたから。

「モテる男は羨ましいね、文字通り両手に花だ」

「片手で簡単に摘める花じゃないけど」

後、結局ベレス先生は俺との関係について話してくれるんだろうか。

何か知ってるような気配があるのは、間違いないけれど。

「……ん、なんだアレ」

クロードが何か見つけたようだ。

つられて空を見ると、何か小さく煌く光が一つ——否、少しずつその数が増えている。

アレは、どこかで見た覚えが——

「——見つけたぞ、贅の蛹よ」

屯所でふとベレスは空を見上げた。

何か胸騒ぎがする。こういう時は決まって何か嫌な事が起こる。

「急報！ 急報！ パルミラ軍との交戦を終えた同盟軍が謎の組織から奇襲を受け、被

害甚大！ 重傷者多数！」

その声に幕から出て、目に飛び込んできたのはボロボロの同盟軍の兵士達。

命からがらここまで来たと言うのが否応なしに分かった。

「これ、は」

『……動き出したか！ くそ、狙いはあやつじやぞ！』

「ベレス殿！ 助力願いたい！」

見れば、デイミトリとエーデルガルトの姿が見える。二人とも武装しておりこれから出撃するようだった。

「目的は」

「クロード達の救援だ。クロードは軽傷なようで、残った同盟兵を率いてこちらに撤退している。

それを援護しつつ、敵を殲滅する」

「——ウイルは」

「無事みたいよ。彼も前線で敵を食い止めてくれるみたい」

内心、胸を撫で下ろす。

だが——闇に蠢く者にとって同盟はどうでも良かった筈だ。今すぐ攻撃する理由は無い筈。

ならば、狙いは彼だろう。

「急ごう、間に合わなくなる」

今度こそ、今度こそ彼を救う。

胎動

森林近くまで撤退した。尚も追撃は続いている。

迫るは獣と人を合成させたような生き物。その魔獣の一撃を振り払う。勢いまでは殺せず、大きく背後へ吹き飛ばされた。

間髪入れず着地する地点へ魔術が放たれる。身を翻し、棒を蹴り飛ばして魔術にぶつかけ相殺する。

「何が目的だ、コイツら一体どこまで……！」

共に防衛を行っていたクロードは、途中で狙いが自分にあると気づいたため、俺から援軍を頼み囨となった。思っていた通り、相手はクロードへ一切の兵を向けていない。

故に敵を倒す事に専念する。集中する。

既に打ち倒した相手の数は五十を超えてからは数えていない。

敵の数は衰える事を知らず。とうとう魔獣まで放り込んできた。

「……ああ、畜生ッ！」

投入される魔獣の本能に敵味方の区別はないらしく。相手の味方であるはずの魔導士や剣士達は皆、この巨体に轢き潰されていく。

コイツがいる限り、こちらの増援にも死人が出る可能性が高い。故にここで仕留める必要があった。棒術では魔獣に致命的な一撃は与えられない。

腕しか残っていない死体から、剣を剥ぎ取る。べったりと、血糊の感触がこびり付いた。

酷い戦いだ。こんなの、虐殺に近い。

それも俺一人を狙えばいいと言うのに、相手は巻き添えすら迷っていない。

「何でもアリかよ……！」

俺と言う人物にそこまでの犠牲を払う理由が欠片も分からない。

振り下ろされる魔獣の腕を躲し、懐まで一気に飛び込んで——心臓があるであろう所を突き刺した。

さらに剣の柄を膝で蹴り上げて、奥へ挟む。そして最後に拳を叩き込むと完全に剣は貫通し、魔獣は動きをようやく止めた。

「——」

息を整える。血液に毒物が混じっていたのか、それを吸っただけで、僅かに体が痺れる。

「ほう、かつては神祖を昏睡させた毒を受けて尚も立つか。やはり贄としては素晴らし
い」

「誰、だ……？」

転移してきた一人の男——着ている服や雰囲気から幹部である事が伺える。

あれは、司書の声とは一致しない。

「知る必要は無い。その記憶すらも、今から糧となるのだから」

男が手を翳す。

——途端、本能が死を察知し咄嗟に体を捻った。

先ほどまで体が合った所を黒の荊が貫いている。

「躲すか、良い。それも想定内よ」

視界外から迫る黒炎。それは回避不可能。全身に力を入れて、防御の体勢に入る。

けれど、それらは俺の四肢と頸を絡めとるだけに終わった。

「さあ、ザラスの禁呪よ。もう一度役目を果たす時だ。その頸を開き、炉への炎を灯すが

よ」

「——ウィル！」

「来たか、だが遅い。最早止められん」

クロードが矢を放つ。男は視線を向けるまでも無く手を翳して、それを防ぐ。反対外

からディミトリが突進し、槍の一撃を見舞うも男は転移してそれを回避する。そこから放たれる魔術を、エーデルガルトが斧の一撃で消し飛ばした。

「まあ良い、既に針は動き出した。あの傀儡が動き出すまで、後少しよ」

男は瞬きの間に姿を消す。

シエズとベレス先生は俺を見るや否や躊躇う事無く突っ込んできた。

「こんなの、一体どうすれば……!」

「離れ、て……!」

炎が首に食い込んで上手くしゃべれない。

体が闇に沈む。二人をせめて外へ投げようと力を入れるけど全く言う事を聞いてくれず思うように動かない。

「大丈夫、まだ諦めない」

「何、を」

ベレス先生の言葉を飲み込む前に、俺の意識は闇に沈んだ。

「——ハハ、は」

気が付くと、暗い空の下にいた。

刺すような冷氣。いるだけで凍えるのではないかと思う程に、この世界は冷え切っていた。

「……ウイル！」

見覚えのある声に振り返る。

ベレス先生とシエズ、級長の三人がそこにいた。彼らも飲まれていたのか。

「無事だったのね……！ さすがに肝を冷やしたわよ……」

「怪我ならしてないから、大丈夫」

いや、本当に紙一重だったけれど。

でも今頭の中を占めているのは、今いる世界の話だ。

これは確か、ザラスの――。

「そうじゃ、ここはザラスの禁呪。何もかもを凍り付かせる闇の中。そのさらに深淵」

「ああ、ここは閉ざされた世界。冷えた炉、贅の行く末、旅の終わりだ」

「うおっ」

緑の髪の少女と、白髪の中性的な人物――神祖ソティスなのは分かったけどもう一人

は誰だ……？

「ラルヴァア!？」

「やあ、こうして会うのは初めましてだねウイル。シエズが世話になったよ」

「あつ、は初めまして……」

「——紹介は済んだか？ わらわは神祖ソティス。主と姿を合わせるの、初めてか
のう」

「ソティス……？」

え、ナニコレ。

何で二人いるの？ 何でソティスさんおるん？

「し、神祖ソティス……？ 本物、なの……？」

「驚いたな……。幻覚……ではなさそうだ」

「……こりや、また。アイツらに言っても信じて貰えないな」

ラルヴァと呼ばれた少年は奥を指さす。

なだらかな坂。その奥は闇の霧が立ち込めていて、よく見えない。

「ウィル、キミが目指すべきは先。この世界の頂だ。そこまで行けば、ここから出る術が
ある」

なら迷つて暇はないな。

ここはあんまり長居出来る場所じゃ無かった筈。早くいかないと。

と、歩き出そうとした途端誰かに服の裾を掴まれた。

振り返って、思わず思考が止まってしまう。

「ウイル……?」

「ど、どうしたんですか」

ベレス先生が、酷く泣きそうな顔をして俺を見ていた。

彼女の指先は弱々しく、けれど離さないように。

「……本当に、行くの?」

「今は手がかりもないですから」

この先に何が待ち受けているのか分からないけれど。

闇に蠢く者が俺を狙った理由があると言うのなら、それは知っておきたかった。あの惨劇を見てしまった者として、責任は果たさないと。

「……分かつ、た」

その指先が離れる。

俺を見るその瞳は、まるで迷い子のようだった。

霧を歩く。敵は全く出てこず。本当にただ歩いているだけ。ソテイスとラルヴァがエーデルガルトやデイミトリ、クロードと話をしているのを横目に聞きながら進んでいく。

やがて見えてきたのは、一つの石碑とそれを囲うようにして林立する複数の柱。

「着いたね、まずはここが一つ目。ウィル、一応聞いておくよ。真実を背負う覚悟はあるかい？」

ラルヴァの瞳は真剣そのもの。挨拶の時に会ったような軽い雰囲気は無かった。

まだ出会って時間は経ってないけれど、シエズを見守り続けてくれていた事から、俺はこの人物に信頼を置いていた。

故にそれは、俺の心を案じての質問と言う事が分かった。

「——ああ、俺は過去が無い。だから理由を知りたい。」

自分が誰で、どうしてこの世界に生まれたのか。自分が何をすべきなのか」

「……そうか。なら、まずは事実を告げておこう。キミにとつては残酷な現実だ」
「……教えてくれ」

ラルヴァは、小さく目を閉じて。そうして俺の秘密を口にした。

「キミの体は、英雄の遺産を模倣し超越するために作られた生贄だ。キミの肉体から英雄の遺産のレプリカが生まれ、キミの記憶と精神を以てしてそのレプリカは本物に比類する」

息が止まる。

どうして自分が武器の扱いに優れ、相手の動きが思い通りになるのか分かった気がし

た。

「そしてここ、ザラスの禁呪は英雄の遺産が生まれた場所。言わば、炉なんだ。彼らの目的はキミに経験を積ませ、最後にその体を確保し強力な武器に錬成する事」

思考が停止する。

どうして闇に蠢く者があれだけの犠牲を出しながら俺を狙ってきたのかがはつきりした。

「……」

「——待ってくれラルヴァ。何故、英雄の遺産が肉体を使用する事に繋がる？ 金属ではダメなのか」

デIMITRの疑問は尤もだ。

武器と肉体を使用する事が未だに繋がらない。そこが結びつかない以上、はつきりしない。

「簡単な事よ。英雄の遺産と言うのはわしらの眷属の体を元に作られた武器であるからじゃ」

「嘘……」

「な……！」

「マジかよ……」

絶句するしかないだろう。英雄の遺産の真実は、誰にも語られていない。それこそ知るのには闇に蠢く者ぐらいだ。

「あやつらはその時に僅かな肉体を遺し、それを素体として人体を作り上げた。

それがお主じや、ウィル。故にその肉体は英雄の遺産となりうるに十分な素養を持つておる」

思考がやつと動き出す。

まずは肉体、そしてもう一つは精神と記憶と告げていた。

つまり俺には――。

「俺には、忘れている過去があつて。ここはそれを思い出す場所?」

「そうだ。その石碑に触れるといい。それでキミは過去を思い出す筈だ」

右手をそつと握りしめて、石碑を見る。

ずつと疑問だった。何でベレス先生が俺にあれほどの感情をぶつけてくるのか。出会ったばかりの人物に向けるには余りにも不自然なモノ。

その答えが、この先にある。

「……」

決意を胸にして、その石碑にそつと触れた。

見えたのは、紅色の花と黒い鷲。――そうして、眠っている女性を起こそうとしてい

る自分の姿だった。

ウイルが石碑に触れた瞬間、彼の姿が闇に包まれる。

彼が記憶を振り返っているのだろう。

「……ねえ、ベレス。貴方もしかして知ってたの？ ウイルの事」

「……多少は」

嘘だ、とシエズは見抜いた。彼女がどういう人物なのか、大まかではあるが分かっている。

そしてウイルの真実を告げられた時も、彼女はそこまで動揺を出さなかった。

「あんまり深くは聞かないわ。でも、せめて一緒に抱えさせて」

「……ありがとう」

瞬間、ウイルを包んでいた霧の一部が離れて、人の形を作っていく。

「構えよ、来るぞ。あやつ の記憶から無作為に選ばれた試練じゃ」

武器を構える。それと同時に霧が晴れて、一人の復讐鬼が姿を現した。

ベレスは覚えている。かつては彼と戦い、そして共に戦った事もある。——この世界

では、きつと至らぬ道にいるであろう彼の末路。

「アレは……俺、か？」

「——殺し尽くしてやる……！」

紅花の記憶 1

——目を覚ます。

見慣れぬ天井を目にして、今自分がルミール村で休息を取っているのだと思い出した。確か、傭兵団の仕事として一仕事終えてきた所だった。

戦った紫髪の女性の事をどうにも引きずっている。不殺で終えようとしていたけれど、最後の最後に抵抗されて、危うく殺されかけた。やむを得ないとはいえ、さすがに手にかけてしまった事は覚えてる。

どうにも殺めた次の日は目覚めが悪い。

「おう、起きたか。酷い面してるな、眠れなかったか」

「うん、まあ……」

ジェラルトの言葉に頷く。

人を殺す事まではまだ許容できた。けれど、その気持ちを肯定し飲み込む事だけは出

来ない。

「……そうか、まあしばらく仕事の予定は入ってねえしよ。アイツを起こしてきてくれるか。そろそろ出立だ」

「分かった」

父親も同然であつた彼の言葉に頷いて、ベレスを起こしに行く。

部屋に入ると、丁度目を覚ましたのか彼女は立ち上がって欠伸をしていた。

「起きたのか、そろそろ出発らしい」

「分かった」

既に荷造りは終わっているようだ。

彼女と共に民家を出る。

——夜明けの空の下、待っているジェラルトの下まで向かおうとして見慣れぬ三人の人影がある事に気付いた。

「あれは……」

そつか、そういえばここが始まりだった。

三人と初めて出合い、三人が本編を通して唯一度だけ共に戦う機会は。

「——しようがねえ、一仕事とするか。行くぞ」

ジェラルトの声に、槍を手にする。背後でベレスが剣を構える音が聞こえた。

今度は出来れば誰も殺さなくて済むようにと祈りながら、地面を蹴った。

盗賊との戦いを終えた後、夜が明け大修道院へ案内される事となった。

この後何があったかは覚えていない。覚えていたけれど霽がかかっていたように曖昧だ。

「どうした、顔色悪いな。まだ引きずってるのか」

「ぬっ、無茶は禁物ですぞ！ 休憩が必要でしたら馬を貸しましょうか！」

「あ、いえ大丈夫です。……殺しが、慣れないものでして」

やはりジエラルトは騙せない。

震える手を、見つめる。盗賊達は誰一人殺していない筈だ。

あの紫髪の女性の事を、やはりずっと引きずっている。自分で自分の体を斬り落としただかのような痛みが、どこかで疼いている。

「飲み込む必要はないだろうよ。お前はお前のままでいい。無理にこっちの稼業に踏み込む必要はねえんだぞ」

「……時間の問題、だとは思うけど」

自分でそう言っておきながら、自信がない。ああ、クソこんな情けない姿晒してられ

ないって言うのに。

「……アレが大修道院？」

ベレスが指さす先には、見覚えのある建物。

——その壮大さに思わず息を呑んだ。

「……帰ってきたくはなかつたんだがよ」

ぼそりと呟くジェラルト。

いろいろと思う所があるのだろう。俺には想像でしかないけれど。

そんなこんなでどんどん奥に通され、気が付けばレア様とご対面。そしてベレスは教職に就く事を選んだ。

「貴方は——」

「ウイルと言います。ジェラルトさんに拾われて傭兵をしていました」

「……何だか、懐かしい気配が……いえ、そんな筈はありませんね。」

「貴方はどうするのですか？」

「そう、ですね」

少し考える。ジェラルトと共に教団の兵士として動く事。そしてベレスの補佐とし

て教職を選ぶこと。

けれど、どちらもまだ俺には荷が重すぎる様な気がしたから。

「生徒として、入りたいです。まだまだ学ぶ事が多いので」

「——分かりました。学級はどれを選びますか？」

ベレスがじつと俺の事を見てくる。無表情だから何を考えてるか分からないけれど、どう答えればいいんだこれ。

彼女にはジェラルトの一件で何か対抗意識持ったりされてるし。

確か、黒鷲の学級を選んだから……まあ教えてもらうなら彼女に相談した方が良いでしょう。

「黒鷲でお願いします」

「分かりました」

あ、ベレスの口角がちょっと上がった。どうやら正解だったらしい。

「皆、紹介するわ。私達の師よ、それから隣の黒髪の彼は黒鷲の一員となる。よろしく頼むわね」

エーデルガルトの案内でベレスと共に黒鷲の学級の面々と顔を会わせる。うわ、ヒューベルト目つき悪っ。……いや、まあ彼の境遇考えたらそうなるか。

……そうだ、そうだった。色々思い出してきたぞ。黒鷲の面々は結構濃い人達が

揃ってるんだった。

「おう、ウイル。よろしくな！俺はカスパルだ！」

「ちよつと声を落とせないかなあカスパルは……。僕はリンハルト。まだ眠いから、このぐらいでいい？」

カスパル、背丈は俺と変わらないぐらいだけど勢い良いよなあ。リンハルトも、俺の知るイメージとほとんど変わってない。

「ひ、ひえつ、いきなり知らない人がふふふ二人も!? 無理です慣れませんか、部屋に籠りますう〜！」

「ベルナデッタ、交友、深める、話すが一番、です」

でた、黒鷲どころか風花雪月で面白い少女ことベルナデッタ。そして異国の女王ペトラ。

「やあ、黒鷲の学級へようこそ！ 貴方がたを心から歓迎しよう！ 我が名はフェルディナントフフォンエーギル！ よろしく頼む！」

「あらあら、初対面の子に誤解されちゃうわよ。私はドロテア。よろしくね？」

一見誤解されやすいが、貴族である事を誇りそして己の使命へ邁進し続ける少年フェルディナント。やっぱり声デカいな。

そして歌姫で知られる事ドロテア。……うわ、リアルで見るとめちやくちや美人だ。

この世界、顔面偏差値高すぎない……？

「クククツ、大変賑やかでよろしい事ですな。私はヒューベルト。以後お見知りおきを」
「改めて自己紹介するわね。私が級長を務めるエーデルガルトよ。よろしく師、ウィル」
「奥底を一切隠すような雰囲気を醸し出すヒューベルト。そして新しい仲間を迎える事に喜びを隠しきれないエーデルガルト。」

黒鷲の面々は俺の知る世界と変わりが無い。そこだけは安心した。

「ところで師、学級対抗戦は知っています？ 今節の最後に予定されているのだけれど」
「初めて聞いた」

「そりやそうでしょ。あの場所、とんとん拍子に話進んでいったし引き継ぎも何もなかったし。」

「私達の学級から誰を出すのかを決めるのも、師の自由よ。まずは級長が一人、それから担任が一人ずつ。そして数人が選出される」

「とりあえずウィル、行こうか」

「はい？」

え、何で？ 即決が早すぎるでしょ。

「キミの戦いに関する苦手意識を克服する機会だと思うけど」

「う、ぐ……」

それを言われたら返せる言葉がねえ。

「おや、戦いが苦手な傭兵とは珍しい」

「ヒューベルト」

「失礼」

……まあ、ベレスの言う通りよなあ。

そろそろ戦いに関する苦手を克服しとかないと。

脳裏に過ぎるあの女性の幻影が消えない。

「——やっぱり断っておけば良かったかなあ」

そんな事を思いながら、青空を見る。

最初の学級対抗戦、まさか自分が出る羽目になるとは思わなかった。

俺の役割は前線。後衛の味方と組んで青獅子の動きを抑える事である。その間に金

鹿の攻略はベレス達が急ぐらしい。要するに塞き止め役である。

そんな俺の相方は——。

「あら、私じゃ魅力不足かしら？」

ドロテア嬢である。

いや、うん。確かに魔導士は後衛として最適だけさあ……。ヒューベルトだと背中
気を付けないといけないようなもするし……。あれ、もしかして最適な人選だったりする
？

「いや、そんな事ないつすよ。精一杯エスコートさせて貰います」

「楽しみにしてるわね、ウイル君」

棒を構える。ベレス……先生からの助言で、刃物を外してみてはどうかという事だっ
た。

そんな訳で俺の手元にはジェラルトさんが無茶を通して作った、長い棒が一つ握られ
ている。不思議と手に馴染むし、刃物が無いと言うのが安心する。

背後から戦いの音がする。そこにはベレス先生がいるので安心だろう。

「んじゃ、やりますか。ドロテアさん、援護お願いしますよっと！」

飛来する矢。棒を回して、叩き落す。打ったのはアツシユだろう。ドロテアではな
く、男である俺から狙ってくるのはまあ、騎士と言えば騎士らしい。

まずはアツシユから落とすとしますか。

——それから数分ほどで、ベレス先生たちは瞬く間に金鹿を制圧して見せた。いや、
強すぎるだろ。俺まだドウドゥーとデIMITリの猛攻を捌くので必死だぞ。

「……なあ、ウイル」

「どうかしました？ 殿下。一応戦いの途中って体なんですけど……」

「お前と、どこかで会った事ないか……」

？ 会った事あるような、無いような……。分からん、俺は知ってるけど多分彼は知らないだろうし……。

「いや、記憶にないですね」

「そうか……。いや、すまなかつたな。再開しよう」

ちなみにデイミトリめっちゃ強かつた。なんなんあのゴリラ。

「ウイル」

「ベレス……先生」

「よろしい」

学級対抗戦が終わり、無事黒鷲の学級が勝利を収めた後。ベレス先生に呼び止められる。

先生って呼ばれるの楽しんでるだろこの人。

「戦ってる時どうだった？」

「……いや、まあ言う通りだった。どうにも刃物を避けてるみたいだ」

紫髪の女性に止めを刺したのは剣だった。剣どころか刃物すら握るのが嫌だと言うのだから、余程応えている。

まだ、夢に出てくるぐらいだし……。

「良かった、キミの役に立てて。負けたくなかったから」

「負けたくないって……ジエラルトの事？」

もしかしてアレか、俺がジエラルトの技をあつさり真似した事か。

三、四年前ぐらいの事をまだ嫉妬してる……？

「ふんっ」

「あ、足踏むのやめてください痛い」

それ、ヒールなんだから結構痛いんですけど!!

ジエラルトが絡むと、ちよつと嫉妬深い部分が出てくるの何なんすかね……。

「いつかキミに勝つから。その時まで立っていて」

「……何ですかね、それ。俺は戦いなんて嫌いんだけど……」

傭兵団なんてやってるのも拾ってくれたジエラルトへの恩義だ。何も返せぬまま、平穏に暮らすなんて出来る訳が無かった。

だから出来る事なら、ジエラルトが引退するその日まで少しでも支えていければと思つて生きてきた。

暗殺は何とかする、絶対に。

「……朴念仁」

「??」

これ、何か深く聞いたら行けないような気がしてきたぞ。

「それじゃあ、反省会をするとしよう」

どこからか取りだした眼鏡をクイツとかけて、ドヤ顔するベレス先生。

割と様になつてるんだよなあ……。

「お願いします、先生」

「よろしい」

やっぱり楽しんでるだろ貴方。

時は流れる。

盗賊討伐、霧中の戦い、聖廟防衛、天帝の剣。

そして何故かグロンダーズ鷺獅子戦前に行われた釣り大会。

せつかくの休日なので寝ていようと思っていた所を、部屋へ強引に突入してきたベレス先生に引きずり出され、釣り大会に参加させられた。

「……」

ベレス先生は大物が釣れるや否や、早速大きさ比べに行つた。……意外とはしゃぐなあの人。

竿をたらし、時を待つ。意外と訓練にいいかもしれないこれ。

「あの、隣いいですか？」

「あれ、イングリットさん？ ええ、まあどうぞ」

「ではお言葉に甘えますね」

青獅子の学級の一人。課題も訓練も時間が異なつていたのであまり一緒になつた事は無い。

でも時折、彼女から視線は感じていた。話しかけたいけど話しかけられないような遠巻きな気配。

最初は人間違いだろうと思つたけれど、続くうちに少しずつ確信してきた。

「……」

「……」

言葉は無い。釣り大会で生徒達の喧騒が木霊するだけだ。

まずいつて、気まずい。ドロテアと出かけた時色々作法とかコツは教えてもらったけど、実戦がイングリットさんなのは聞いてないつて。

「あの……ウイルさん」

「な、なんですかね」

「その……どこかでお会いしたコト、ありませんか？」

それをよく聞かれる。最初はデイミトリ。次はフェリクス、シルヴァン。そしてマイクランも、俺を見て瞠目していたのを覚えている。

けれど、俺に記憶はない。過去の事は分からない。

「……過去の事はよく覚えていなくて。多分、貴女が望むような形では答えられないと思います」

「そう、ですか。私の方こそ、急に変な事を尋ねてすみません」

雰囲気、重い。

周りの声すら届かなくなつて、俺と彼女の二人だけの世界になつたかのよう。

「……聞いてくれますか、私が憧れた人の話を」

「憧れた人……？」

そんな人原作にいたっけ……。いや、憧れた人物は一人いたな。

「その人は、私にとつて幼馴染のような存在で。拾われた子ではあるけれど、私達はそんな事気にしませんでした。」

騎士の真似事をして遊ぶ私達を、あの人はいつも少し離れたところで眺めていた。余

り喋らず、表情も動かない、仮面のような人でしたけど。それでも怪我した人がいたら、手当出来る人の所まで運んだり、兵達の訓練が近づけば訓練の武器を手伝うなどしてくれています。

表には出ないけれど、とても優しい人だったんです」

イングリットさんの目はここではない遠くを見つめている。

その儂げな雰囲気言葉に挟む事すら出来なかった。

「彼が強い人だと分かったのはとある訓練の日。兵士の手から抜けた槍が、私達の下へ向かってきたんです。勿論それはただの不幸な事故で、槍も訓練用の木製で。けれど当たれば大怪我は免れなかった。

そんな私達の前に彼は立って、その槍をあつさりと掴み取りました。あの時の背中はとても大きく見えて、頼もしいと感じたのを覚えています」

とても大切に、けれど触れる事の出来ない宝物を眺める様な瞳だった。

「彼は私達と同じ訓練を受けて、でも私達よりどんどん強くなつて。でも彼は驕る事もなければ手を抜く事も無く。ただ一心に、訓練に打ち込み続けていました。

気が付けば、彼の背中を、彼の後を追おうとしている自分がいて……。幼馴染もいて。

——幸せな、日々だったと思います」

止まったような感覚の中を、風が流れていく。

「あの人はとある御方の護衛として選ばれました。とても、名誉ある事です。……その、筈なんです。」

……帰って来たのは酷い怪我を負った御方達と、傷ついた護衛達。その中に彼の姿はありませんでした。

卑劣な手を使った者達相手に単独で殿を務めた——それが最後に見た彼の姿だった
「そうです」

彼女の声は震えていた。言葉にするのすら、やっとと言った様子だった。

……何を、どう伝えたらいいのだろう。彼女の悲しみにどうやって寄り添えばいい。

「……」

「……ありがとうございます、最後まで聞いてくれて」

「どうして、その話を自分に……？」

「なんで、ですかね。はつきりと分からないんです。ただ貴方を見ていたら、どうしてかあの人を思い出してしまつて。」

おかしい、ですよ。貴方はあの人とどこか似ているだけで、本人って思うなんて」
小さく、自虐的に微笑む彼女に目を逸らす。

俺の過去が分からない以上無関係とはいえない。もしかすると、もしかするとその人物が俺である可能性だってあるのかもしれない。

それを、証明する思いも否定する記憶もないのだけれど。

「一つだけ、我儘を言ってもいいですか……?」

「大丈夫です。何でも、言いたい事を。俺も忘れませんから」

「……貴方が、私達の学級に来てくれてたら、良かったのに」

……でも、運命は選んだら戻れない。

それはイングリットさんもきつと分かっているだろう。

「……貴方に感謝を。私の長話に付き合ってくれて」

「いえ、俺もあんまり他所の学級とここまで話した事は無かったので」

「そうなんですか、結構話好きそうでしたけど。ほら、ドロテアとかカスパルとかよく話してるじゃないですか」

「あの辺は寧ろ向こうからガツガツ来ると言うか何と云いますか……結構人見知りするんですよ俺」

カスパルには戦いのコツとか秘訣を聞かれたり後は一緒にトレーニングしてるぐらい。ちなみに俺が帝国に行く機会があったら、ベルグリーズ伯が稽古をつけてくれるらしい。何でもカスパルが俺のことを伝えたら、興味を持ったとか。マジで何してくれてるんだアイツ。

ドロテアは言うまでも無いが、俺をからかって遊んでいる。あれはどうみても弟を弄

る姉みたいな雰囲気だ。その後のベレス先生からの個人補修は何故か、他の生徒の倍近くまで時間が延びてたりする何故だ。

「でも黒鷲の学級では、前線の切り込み役と聞きましたけど？」

「先生がスパルタすぎるんすよ……」

何か前線めっちゃ投入してくるし、めっちゃ近くにいるし。気が付けば俺とベレス先生で敵を返り討ちしている有様である。

武術大会は出禁食らいかけたたりしたし、何かこの体無駄にハイスペックよね。本人の精神だけがクソ雑魚すぎる。

「……そこまで思ってくれる先生でいいじゃないですか」

「……まあ、人には恵まれたと思ってますけど」

そこは感謝している。ジェラルトに拾われなかつたら、どんな末路を辿っていたのかなんて簡単に予想が付くから。

せめて救われた命の分は、恩を返したい。

「あ」

「あっ」

イングリットさんと声が重なる。話を重ねるうちに、気が付けば餌を全部食べられていた。

「……逃しちゃいましたね。どれぐらいの魚だったんでしょ？」

「まあ、もう一回仕掛けますよ。まだ貰った餌あるんで」

餌を巻き付けてもう一度糸を垂らす。

水面が小さく跳ねた。

「もし良かったら、一緒にしてもいいですか？」

「ええ、こちらこそ。餌は俺が付けますよ」

何でもない小さな一時。

こんなささやかな時間が、一番幸せだった。

紅花の記憶2

た。
グロンダーズ鷲獅子戦は終わりその直後、ルミール村で異変が起きたとの連絡が入った。

休息を済ませ、すぐさま村へ急行すると各地から火の手が上がりつつある。

「……………」

何度か親切にさせて貰った村だ。思い入れは、かつての自分以上にある。

焦る気持ちを抑えつけ、ベレス先生の指示に従いながら。得物の棒を手に、狂乱した村人達を気絶させていく。

「——ほう、そこにいたか贄よ」

「！」

声が響くや否や、上空から迫る黒炎。地面を転がって回避する。

「……………ふむ、多少は育ったがさて、結果としてはどうか。確かめさせてもらおうぞ」
「何を……………っ！」

死角となっていた右側から風が吹いた瞬間、すぐに防御の構えを取る。

突如、姿を現した人型の魔獣。その蹴りが十全の破壊力を以て俺に叩き込まれた。

「ち……………いつ!」

反応しきれず、壁に叩きつけられる。奇襲に気付けなかった故に、まともな防御姿勢すら取れなかった。

続け様の攻撃を、咄嗟に割り込んだベレス先生が防いだ。それに間髪入れずジェラルトが急所目がけて槍を突き出すも、魔獣は当然の如く回避する。

「無事……………!?!」

「何とか……………!」

両腕が激しく疼くような痛みを訴えている。ベレス先生が、手を添えるとそこから緑色の光が溢れて、痛みが少しずつ和らいだ。

「ありや……………ただの魔獣じゃねえな。ヤツらのとつておきらしい。くそつ、けしかけた本人は既にトンスラか」

魔獣の四肢には夥しい量の血と肉片、髪の毛、布切れが張り付いている。

こいつが、この村を虐殺して回ったのだと見ただけで分かった。

「師、来るわ。指揮を!」

「皆、散って! 二人一組で対処を!」

それからの事は必死だった。魔獣の攻撃に食らいつき、黒鷲の面々とジェラルト傭兵

団でやつと撃破した。

ルミール村の生き残りはほんの僅か。司書トマシユ——ソロンは行方をくらし、所在不明。

正体不明の敵に、大修道院には暗い空気が立ち込めつつあった。

そうして迫る筈だったジェラルト暗殺。

しかし、俺の記憶と違い始めたのはモニカと言う少女はあの後無事救出され——言動も俺の知るモニカではなかったから、多分本人なのだろう——。ジェラルトは暗殺される事無く、大修道院の兵士達を纏めてあげており、全然死ぬ気配を見せない。

闇に蠢く者も、ルミール村での一件以降活動の兆しは見せぬまま。俺の記憶と、現実には乖離し始める。

そんな最中、エーデルガルトさんは帝国へ戻り王位を継承した。何故か、黒鷲の面々も集められ、その即位式を見守った。

で、その最後にである。

「我ら、アドラステア帝国は中央教会へ宣戦布告する!!」

——その言葉に俺とベレス先生が言葉を失った。

で、周辺を取り囲む兵士達。

「エーデルガルト、これは」

「騙して御免なさい、師。皆、武器を下げなさい。彼らとの交渉に刃は不要よ」
兵士達が武器を下げる。

……ああ、そつか。色々イベントが無くなったから、こういう形になったのか。誰かに唆されたか、何か吹き込まれたのか。

まあ、間違いなく後者なんだろうけど。

「師、帝国につくか教会につくか選んで頂戴。向こう側に着いたからって、ここで殺したりなんてしないわ。我が名に誓って約束する」

「他の子には話しておいたんだね」

「皆、師が私の下につくなら共に戦ってくれると約束したわ。……ほんと、級長の私より慕われてるのね」

「エーデルガルト、キミの目的は？ 教会と戦って、どうするの？」

「フォドラを教会の支配から解放するのよ」

そうして彼女が語ったのは、フォドラの歴史。眷属達が裏から支配してきたため、それらをフォドラから解放すると言う内容だった。

……それもきつと、闇に蠢く者に利用されたのだろうけど。

「……分かった、最後まで貴方達を導こう」

紅花ルート……ああ、帝国として王国や教会と戦う道になったのか。

もう、引き下がれない。

そうして始まった大修道院攻略戦。

激戦だった。目の前で、知った顔の人達が刃を持って立っていて。こちらに斬りかかって来た。

投石や魔法が飛び交い、火の粉が辺りに巻き散る。

「ベレス、ウィル……やっぱりこうなっちまったか」

「ジェラルト」

「……」

教団兵として立ち塞がるかつての人。

でも、その雰囲気には殺意は感じない。

「……安心しな、お前らだけはきっちり守ってやるからよ」

ジェラルトは槍を、背後へ——レア様へと向けた。

「悪いな、レア様。これでも何百年と義理は通してきたんだ。だったら構わねえだろう

よ」

「……！」

微かに沈んでいたベレス先生の顔が、明るくなった。

ああ、良かった。ジェラルトは、この人だけは敵に何てしたくなかった。

ジェラルト傭兵団に属していた教団兵は皆、ジェラルトの離反に同意し瞬く間に反旗を翻す。

趨勢は決しつつあり、大修道院から逃げ出す者達の姿も見受けられた。

「あれ、は……！」

上空から見える白い竜。

放たれた光線。崩れていく足場に、ベレス先生が巻き込まれていくのが見える。

「ベレスッ！」

得物も投げ捨てて、彼女の下まで瓦礫を飛び移ってその体を抱きしめる。

真下に見えるのは巨大な川。どこに流れ着くか分からないけれど、どうかこれで終わりじゃありませんようにと、目を瞑った。

「……………」

目が醒める。洞窟の中にいたようで、焚火の明かりが天井まで照らしていた。

思い出すのは自分の名前。そして直前までの事。

「よお、先に起きたのはお前か。まあ、そういう所はきっちりしてたよな」

「……ジエラルト？」

見えたのは、ジエラルトの姿。着ていた筈の外套が酷く痛んでいて、顔色もどこか悪いように見えた。

状況の把握がまだ落ち着かない。

「色々分からねえ事はあると思うが、聞いてくれ。……大修道院での戦いから二年が過ぎた。戦況は膠着中らしい。まあアイツの育てたガキどもは、ちゃんと芽が出始めてるって事だ」

「……ジエラルト、は」

「俺か。俺はお前らが起きるのを待つてるだけさ」

ジエラルトの目線が優し気にどこかを見る。その先を追うと、高そうな毛布にくるまれたベレス先生の姿が在った。

「あの後、お前らを必死で探してよ。やっと見つけた時には寿命が縮んだかと思つたぜ」
そこからずつと、ここで俺とベレス先生を守ってくれていたのか。

「……なあ、ウイル。戦いは嫌いか」

どう答えるべきか迷う。普段であれば偽りを即答する。

けれど、この瞬間だけは、本音で会話したいと思つた。

「ああ、大嫌いだ。痛いのはやだし、血が出たら止まらないし。憎しみ合って罵り合って。殺し合って殺され合って。」

ただ疲れるだけだし、勝ったって嫌な気持ちも残るだけだ」

「……そうか、そうだな。確かにそうだ。下らねえよな、戦なんざ」

「——でも、それでも。そうまでして、誰かが生きてた証を残したい。そうでもしないとやりきれないって人がいるんだろうって思った」

エーデルガルトにとって、実験で死んでいった人々がそうであったように。

デイミトリにとって、ダスカーの悲劇で死んでいった人々がそうであったように。

「……理由なんざ人それぞれだ。でもよ、人間ってのは、何か一つ譲れないモノのために理不尽を通す意味を探すのさ。」

俺にとってベレスがそうであったようにな」

ジェラルトは小さく息を吐く。

どうしてか、これがこの人と最期の会話になるのだと直感で思った。戦死などではなく、もつと自然な。

時間の限界による別れが、迫っているのだと悟った。

「ウイル、見つけられたか」

「……分からない。でも、この選択は正しくないかもしれないけど、それでもこの先に俺

が生きる理由が見つかるのなら、走り抜きたい」

「正しい正しくないなんて、途中じゃ分からねえさ。そんなのはよ、最後の最後にやっと分かるってモンだ。

ウイル、お前なら大丈夫だ。かなり長い遠回りになるが、お前はいつか辿り着ける」それはまるで大修道院の授業のようで。

どこか懐かしい気持ちだった。

ジェラルトは、鞘込めの剣を俺に差し出した。

「これ、は」

「俺が昔、騎士団長だった時に使ってた剣でな。いつか、ベレスに渡そうと思ってたんだがタイミングを見失っちゃった。

天帝の剣なんて、大層なモン使いこなしてるアイツに送ってやるにはちいと気恥ずかしくてよ」

剣を、両手で受け取る。

その重みはまるで、彼が生きていた時間そのものだと思った。

「ウイル、お前にならアイツを任せられる。頼んだぜ。お前なら何の心配もねえ」

「……は、い」

もう、悩んでなんかいられない。

帝国に合流する。初めて会った時は大層驚かれた。一応、ベレス先生も無事である事を伝えると、皆安堵の息を零していた。

ベルグリーズ伯には早速稽古をつけられた。何故か分からないけど、でもすぐくためになったし、良い経験になった。

そして——戦場へ。

一度出ればもう迷ってなどいられない。殺した、殺した、殺し尽くした。

戦場を、敵の血で赤く染めた。

不思議な事に、戦えば戦う程相手がどういふ動きをするのかが読めてきて、敵を殺すという事はまるで作業のようになってしまう。

「——おい、大丈夫かウイル」

「……あ、ごめん。ぼーつとしてたカスパル」

「無理するなよ、お前前に出過ぎだぜ。今度は俺も出てやるからよ」

「大丈夫？ のんびり寝れる世の中はまだまだ先だからね」

黒鷲の面々の存在が救いだった。

彼らと話す時だけ、あの時の頃に戻れたようで。

「にしても、ウイル君身長変わらないのね。ホントあの時のまま」

「……人が気にしてるところを突いてくれるなあ」

「あら、ごめんなさい。でも嬉しいわ、貴方と話しているとあの時に戻れた感じがして」

まだ、機械にならなくて済む。

心を失わなくて済む。

「むふふ、今は私の方が身長高いですからねえー。ほら、ベルナデッタお姉さんと呼んでくれてもいいんですよー？」

「ウイル、身長、変わらない。不思議、です」

「後でヒューベルトとベルナデッタの部屋に行くわ」

「ひええええ、何でそんな惨い事するんですかあー!!」

「私が何か？」

「——ひゅっ」

「……立ったまま気絶、してる……?」

救いだった。寄る辺だった。

まるで夜の中に差す月明かりのようで。

「ウイル、感謝してるわ」

「……エーデルガルトさん？」

「だって、貴方私に着いてくる理由なんて無かった筈でしょう。なのに帝国についてくれて、戦ってくれて。」

「……あんまり公では言えないけど、貴方がいてくれて本当に嬉しいのよ。貴方だけは離れる可能性だって、考慮してたのに」

「そいつは、まあ嬉しい誤算なようで。俺だって恩義は重んじるタイプですよ。……救ってくれたのは教会じゃなくて傭兵団でしたし」

「……そうね、そうだったわ。まだ私、貴方を見誤っていたみたい」
「ええ、だからどうか俺を戦場に。」

「貴方の想像以上の戦果を出してきますよ」

「自分で決めた道。自分で選んだこと。」

「今更それを覆すつもりは更々ない。」

「——ヒューベルト、帰って来た」

「ご苦労様でした。貴方のおかげで奪われた拠点と膠着状態だった戦況をいくつか覆す事が出来ましたよ。」

「後は、先生が戻ってきてくだされば鬼に金棒ですな」

「……ああ」

「まずは顔を洗ってくるとよいでしょう。次の作戦はまた追って指示を出します。貴殿

は充分な休息を取ってください」

「……感謝する」

三年が過ぎた。戦争は終わらない。

先生が起きた事を聞いた。やっと、あの剣を渡す事が出来る。

ジェラルト、やっぱりあの剣は俺には重すぎたよ。

「……ウイル？」

なあ、先生。俺、今どんな顔してる。

初陣してから、鏡を見るのが怖くなって。一度も見れていない。

「……キミは変わらないね」

「そういうベレス……先生も変わりないよう。ちよつと安心した」

「それはこつちのセリフ」

彼女にジェラルトから預かった剣を渡す。

血塗れた手に、この剣は似合わない。

「ジェラルトから預かった剣だ。どうにも、俺には合わなくて」

「……そうか。でも、ジェラルトからキミに渡された剣だから、私もキミに持っていて欲

しる」

「……そう言われたら、返す言葉は無い。

剣を腰に差す。戦場で使う事はない事を願った。

「起きるのが遅くてごめん」

「何が？ 別に寝たくて寝てた訳じゃないのに」

その言葉に彼女は目を逸らした。

え、マジ？ もしかして眠たくて寝てたのこの人。

「……まあ、休息も大事だしなあ」

機械になりかけた心を、人に戻すのに大切な事だ。

俺も人の事は言えないし。

「ウイル……大丈夫？」

「……」

まあ、でもやつぱり。この人に隠し事は出来ないよな。

「まあ、ちよつと……辛いのはあるかなあ」

今から死ぬ、という事を悟った時の絶望の目。それが自分に向けられる時、自分が自分じゃなくなるみたいで。

弱音は、吐けなかった。

ベレス先生が来てから、帝国軍はさらに破竹の勢いを得た。

瞬く間に進軍は進まれ、レスター諸侯同盟は帝国に飲み込まれその姿を消した。幸い、クロードが降伏を選ぶと、それ以上の戦闘を続けない者ばかりなのは助かった。

そうして王国との決着をつけるべく、まず向かうのはアリアンロッド。

難攻不落の城砦を落とす戦い。それがどういいう事を意味するのか、なんて嫌でも分かる。

「……」

脳裏に過ぎるのは大修道院の記憶。

ああ、そうだ。ここで青獅子の学級の面々を殺すのだ。

彼らの死が歴史の闇に埋もれないために。忘れ去られないために。彼らが生きていた記憶と証を、刻むために。——せめて、俺の手で。

剣を手に、兵士を斬り殺した。

眼前に迫る雷を横に転がって回避する。ロドリグ——この戦いの要ともいえる人物。

彼は俺を見て、目を丸くしていた。

「お前は……いや、馬鹿な。そんな筈はない。あの子が……——いや、迷いは既に断つて

いる。これ以上、お前達を進ませはしない！」

迫る魔法。相手の兵士の体突き刺し、それを盾にして前進する。

ある程度迫った所で体ごと剣を振り払い、一気に肉薄。

迷う事無く、首筋を剣で斬り裂いた。

「……ああ、そうか。お前の生存を信じ探さなかった私への罰、か。許してくれ、とは言えんな……。生きて、くれた、だけ、で」

「父上ッ！」

丁度、フェリクスが駆け付けていたらしい。

憎悪に満ちた瞳が俺を見て、微かに薄れていくように見えた。

「お前、は……いや、忘れろ。クソッ、何故こんな時に……！」

迫る剣。数合交える都度、剣は火花を散らしていく。

だが、勝ったのは俺の剣だった。

フェリクスの胴を、剣が薙いだ。

「——何故今になって思い出した……。何故今更、俺達の下へ……。」

兄上にもお前にも、俺の剣は届かない、か」

使っていた剣は刃毀れしていて、最早役目を果たさないだろう。

敵目がけて投げつけると、それは兵士の体を串刺しにして地面に縫い留めた。

フェリクスの手元から剣を取る。血が、こびり付いた。

今、自分はどんな目をしているのだろうか。

敵を殺す。殺して殺して、屍山血河を作る。

眼前に槍が刺さったのを見て足を止める。

「……ああやはり貴方、は」

見えたのはペガサスに騎乗した女性。イングリット。趨勢は決しつつある。けれど、それでも彼女は降伏を選ばないだろう。

ならば、せめて。俺の手で。

転がっていた槍を手に取り、ペガサス目がけて投げつける。反応が遅れたのかそれは翼を貫いた。

よろめいた隙を逃さず、飛びあがり彼女へ掴みかかる。馬上から引きずり下ろし、彼女の持っていた槍を奪い取った。

——なるべく苦しまないように、一瞬で。

その後頭部に手を添えて槍を一思いに突き刺す。心臓を貫いた感触が、掌へ確かに伝わった。

彼女の指が、そつと頬に触れる。徐々に光が消えゆく瞳を見つめた。込められたのは憎悪ではなく、回顧。古びた写真を大事に眺めるかのような目だった。

「……ねえ、私、貴方を目指して、貴方のようになりたくて、守れる人になりたくて。私、貴方に届いた、かしら」

——言の葉の意味を、理解してはいけなと思った。

もし、理解してしまえば今度こそ、俺は戻れなくなる。

白銀の乙女は、血で赤く染まった。

最早、勝敗は決した。兵士達は降伏に応じず、最後の一人までもが戦死していった。

「手柄でしたな。貴殿のおかげで随分と楽をさせて貰いました。次は私どもに任せて休まれるとよい。今の貴殿には、休息が何より必要でしょう」

「……ヒューベルト、俺今どんな顔してる」

「……学生の頃とは別人ですな。光を失くした仮面のような顔と言えば良いでしょうか。先生にも、主にもあまり見せぬ方が良いと思います」

「……そう、か」

場所を移動する。森の外れ、誰も来ないようなところ。——途中で雨が降り出した。濡れる事に、何の躊躇もない。

人気がない所で吐いた。胃が空っぽになっても吐いた。涙が止まらない。

余りにも無様だろう。

だけど、こんな姿を人前に晒す訳にはいかないから。兵士達の士気を下げる訳にはい

かないから。一人で飲み込むしか無いのだ。

「……」

アリアンロッドを落とした。

これで良かったのだ。自分で選んだ道で、引き返す事は出来ないのは分かっていたから。

行くと決めた。もう戻れないのは知っていた。だから、進むしかない。

「……ウイル」

先生の声があった。

自分がどんな顔をしているのか分からなくて、どんな顔をすればいいのか分からなくて。眼を合わせる事が出来ない。

「……先に戻っておいて欲しい。俺も後で戻るから」

「それは出来ない。今のキミは、そのままどこかに消えてしまいそうだし、何も言い返せなかった。」

彼女の言葉の通り、このまま消えてしまいたいと心の何処かで思っていたから。

——ふと、温もりを感じた。抱きしめられたと分かったのは、ほんの数秒後。

「……血の匂いが移るから」

「構わない。私もそうだから」

「……何で、構うんだ。俺みたいなやつのこと。

こんなになんかどうしようもない、自己嫌悪の塊を」

「どうして、そう思うの？」

「自分が嫌いだからだよ」

知っていた筈。彼らと敵対する運命であつたのは。

消えていく命が目の前にあつて。それを殺す事を受け入れればいいのに。どこかで拒んでいる。見なかつた事にしようとしている。

——受け入れた人間が、こんな迷う筈が、無いのだ。

「……なら、それは全てが終わつた後でいい。私が傍にいる。私が受け止める。

私がキミを導くよ」

「何で、そこまで」

分からない。俺と言う人物にそこまで付き合える理由が見えない。

だって、同じ傭兵団にいただけ。たつたそれだけの共通点しかないのに。

「だって共に生きて、ここまで来た。だからこれからも共に行く。

貴方を一人にしない。——そう、ジェラルトと共に約束した」

「……」

そこまで言われたのなら、うだうだと悩んでいる訳にはいかないのだと気づいた。そ

の信頼に応えるべきと、叫ぶ自分がいた。

悩むのは、その後でいい。後悔にのたうち回るのも、泣き言を漏らすのも全てが終わってからで。

解決にはなっていないかもしれないけど、一先ずの妥協としては充分だ。

「……ありがとう、ベレス」

「ふふっ、どういたしまして」

ああ、やっぱり彼女には敵わない。

王国軍との決戦——タルティーン平原の戦い。

ここでも俺は、青獅子の生徒達を手にかけた。

まずはシルヴァンを斬った。躊躇はとつくになかった。

「……ああ、畜生。情けねえ、結局足元にも届かなかった、か」

メルセデスを斬った。もし同じ学級であったのなら、彼女に救われた未来も在り得たのかもしれないと思った。

ドウドウを斬った。紋章石を手にしたのが見えたため、得物を投げつけ弾いた後に落ちていたナイフで心臓を穿った。

「……何故、何故だ。お前は、この王国で育つた筈だ。人と触れ、共に生きていた筈だ。なのに何故、お前はそこにいる」

「……なら、地獄で待つていてくれ。俺も、きっとそこに行くから」

デIMITリは、ただただ強かった。だが、迷いを払い為すべき事を定めた俺に躊躇は無かった。

互いに、体へ傷を負いながらの死闘。

アラドヴァルが、俺の脇腹を裂いた。——それと引き換えに俺の剣は、デIMITリの胴を、深く斜めへ切り裂いた。

「……国も守れず、友も引き戻せず。……何て、愚かなんだろうな、俺、は」

これで決着かと思つた途端、戦場へ乱入する教団兵。

正体を現したレア——聖者セイロスが騎士団を率いて、戦場に姿を現していた。

「ウィル！」

「だい、じょうぶ」

ベレス先生に肩を貸して貰い、陣地まで撤収する。今すぐ死ぬ傷では無いのは幸いだった。

「私は追撃出来るかどうか見てくる。ここで待つてて」

セイロス騎士団は、帝国軍が勢いを得てしまっている事。そして既に王国軍が立て直

し不可能な状態に陥っている事に気付き最小限の体勢を整え、撤退準備に入っていた。もし出来るのなら、終わるまで傍にいたかったけどさすがにこの傷では足手まといだ。

「……」

林の木に背中を預け、息を吐く。周囲に王国兵の姿は無い。セイロス騎士団の姿も無い。

後少しすればベレス先生が戻ってくるだろう。

もう少し。もう少しで戦いが終わる。そしたら元王国に向かおう。彼らの墓を作り、手向けをしなければ。そしてそれが終わったら……何をしようか。

ベレス先生は俺と共に生きると言ってくれた。

彼女の後を追って、傭兵でも続けてみようか。

「育ったか、頃合いよな」

その声に反応も出来る訳が無い。

瞬間、避ける間もなく無数の黒い荊が体を貫いた。

「ぐっ、がっ……」

「良い、実に良い。獣共は殺し合い、緩やかに自滅へ向かっておる。後は贄を捧げ、傀儡の封印を解けば我らの悲願は間も無くだ」

体が、闇に飲み込まれていく。

全てが沈む。沈んでいく。

闇の中。何も見えないけれど、意識だけはあつて。でも多分それもすぐに消える。自分の体が、解けていく。肉体が肉体じゃなくなっていく。

ああ、やだなあ。

死にたくない。

まるで、水面に沈む小さな蛹のように。

その記憶は闇に溶けた。

真実の記憶

五年後のデイミトリの幻影を打ち倒した。

五人ならば、そうでもないし私やシエズのような傭兵がいれば左程苦戦はしなかった。

「……あれは」

「心当たりがあるの?」

「……ああ、頭が痛い程にな」

デイミトリは難しい顔を隠さず、目を伏せた。

——ふと、霧が晴れた。

見ると、ウィルが地面に蹲っていた。

なんだ、あれは。

「っあ……!」

立っていられない程の眩暈がする。

汗が体中から噴き出して止まらない。

俺は、ベレスと既にあつていた？ いや、違う。そうじゃない。

少なくとも、共に大修道院へ向かった事は無かった。

ならばこれは確かに在り得た記憶の一つ。

「ウイル！ 大丈夫……!？」

「ベレス、先生……」

「っ………！ もしかして、記憶を」

ああ、やっぱり。

この人は、共にあの世界を駆け抜けたのだ。

「……」

息を落ち着ける。やっと、心が状況を受け入れてきた。

俺はこの手でシエズを、青獅子の生徒達を殺したのだ。

彼女と目を合わせる事が出来ない。どんな顔をすればよいのか分からない。

「——大丈夫かい？」

「………思ってたより、キツイ」

頭痛が残る体を、立ち直らせる。

思い出した記憶は、一つだけ。

まだ残っている。何となく、そう分かる。

恐らく青獅子と金鹿の記憶。

誰を、手にかけるのか。何を思い出すのか。

知るのには確かに怖いけれど。分からないまま生きていく事だけはもつと恐ろしい。

「ウイル……」

ベレス先生はきつと、今の俺とは比較にならない程の記憶がある。それを彼女は、たった一人で背負い続けていた。

小さな背中、ずっと。

「まだ心は折れておらぬようじゃのう、安心したぞ？」

「この程度で折れてちゃ、合わせる顔がないんで……」

ソティスの顔は、安堵の表情を浮かべていた。

確かに、あの記憶の密度を一度に受ければ廃人になったって不思議ではない。

「……ウイル？ 何で、目逸らすのよ」

「……過去の記憶で、貴方を殺した」

「はっ。」

「だからその……貴方を殺した記憶があるんだよ、俺は。」

どんな顔をすればいいのか分からなくて」

「……………ふーん」

両頬を抓られる。普通に痛い。

「知らないわよ、そんなの。私じゃない私なんてどうでもいいわ」

「えっ」

「悩むのなら、せめて今の私を見て悩みなさいよ。傭兵なんだから、一つ違えば殺し殺されなんてのは当然でしょ。

それぐらいの覚悟なんて普通にあるわ」

シエズはごく当たり前のように、そう言い放った。

「……………そっか」

「そうよ、別に他人にどう思われようが勝手だし気にならないけど、貴方は別。

だからちやんと言っておかないとね」

許された、なんて訳ではない。

俺が殺したシエズは本人にとつて別人だ。だから、既に割り切っている。

少しだけ気持ちになる。

「ラルヴァ、この先には二つ目の記憶が？」

「うん、そうだ。行く記憶は合わせて三つ。残り二つだけど、大丈夫かい？」

「……まあ、それしかないからな。それに、まだ足りてないのがある」

あの記憶だけで、ベレス先生がここまでの感情に至る理由は分からない。

そして、俺が青獅子の学級を手にかけて時に彼らの言っていた事。

多分その真相はこの先にある。

「……デイミトリ？ どうかしたのか」

よく見れば、僅かに表情が柔らかくなっている。

何て言うか、少しだけ明るくなつたと言うべきか。

「いや、ようやく気付けたと言っただけだ。随分と近くにいたのに、分からなかったのも滑稽だなと思つてな」

「……ここまで回りくどい人だとは思わなかったわ」

「見た目通りつて事だろうさ」

まあ、デイミトリの抱えているモノは余りにも重すぎる内容だ。それに整理がついたと言ふのなら、必要以上に聞き出す理由は無い。

また道を歩く。歩いて、ようやくたどり着いたのは二つ目の石碑。

「……？ 何か書いてある」

「それは記憶を刻んだものだ。誰かが書き記したのではなく、刻まれた記憶が文字となつて残っている。」

つまりは、何一つ飾られない真実の記録さ」

どうしてか、書いてある事は読み取れる。

内容を呑み込む前に自然と、言葉が口に出た。

「このだいちには、かみさまとそのかぞくがすんでいました。」

かれらは、おだやかにへいわにつつましいくらしをしていました」

……レア様達の眷属の事だろうか。

「あるひ、かれらはひとびとからかんげいをうけました。」

かれらはかみさまと、はなれてすごしていたにんげんたちで、おたがいにかかわろうとせずしずかにくらしていたのです」

人々？ 誰の事だ。

「かみさまはにんげんのかんげいをよろこんでうけました。うたげはつづき、ひととかみさまたちは、ともにてをとりにきていこうとやくそくしました」

……彼らは敵対していて、それを終わらせるために友好的になろうとした？

何かが、何かがひつかかる。

この先を読んではいけなさと感じたが、既に口は次の言葉を紡いでいた。

「だまされて、どくをのんだので、かみさまはえいえんにねむりました」

「……ソテイス？」

「儂なら構わんで、ベレス。ウィル、終わるまで読んで良い。止めはせぬ」

「かれらはかみさまをいけにえにくべました。ばらばらに、ばらばらに。こわれないうにばらばらに。

からだのすみずみにいたるまで、ぶきとしてたいせつにつかいました。

ひとびとはかみさまとともにいきたものたちを、ころしました。おんなこどもにいたるまで、めにはいったすべてを。

そしてたには、ちであかくそまりました。」

……。

「赤き谷のザナド……。赤き谷って、そういう……」

「……惨いな」

「成程、その虐殺で生まれたのが英雄の遺産か。……つまり俺達の先祖は、それに加担したか、口止めに利用されて……。いいように扱われていたって事かよ」

……ラルヴァは、この石碑に書かれている事は真実を記録した事だと言った。

つまり、何者の手にも虚飾されていない。純粹な記憶。

エーデルガルトは、この言葉に何を感じたのだろう。デイミトリは、彼らの嘆きに何をくみ取ったのだろうか。

そしてクロードは、これらの出来事が何故隠されていたのかを納得した様子だった。

「……ソテイス」

「真実じゃ。儂は、あの時毒を飲まされ、この闇に放り込まれた。覚えておるとも、魂まで凍える様なあの冷たさを。

じゃが、ラルヴァ。お主は儂を殺した側の人物じゃろ？ 何故、教える？」

その言葉に、全員がラルヴァを見た。

俺とクロードを襲撃した連中と、ラルヴァが同じ組織だと言うのならこれは裏切りに近い。

だって、彼はまだ一度も。俺達に敵対の姿勢を見せていないのだから。

「僕も彼の記憶を追体験したからね。——彼は、僕にとって試作品だから」

「し、さくひん……？」

「おっと、悪い意味に捉えないで欲しい。元々僕は、ソテイスとその眷属を討つべく、色々奔走しているね。」

その過程で考えたのは、彼に僕の一端——転生の力を備えさせる事だった。死んでも

魂の循環を途切れさせず、武器の材として使用される人間の本質を維持し続ける。

それで生まれたのが彼だ。そしてシエズは言うなればその観察者として選んだ器だった」

「ああ、やつぱり。私も作られてたつてワケね」

「……軽蔑したかい？」

「いえ、まさか。それでも貴方を信じてるわよ」

……つまりラルヴァは、俺の記憶を体験して。

感情論から、俺達に味方しようとしている……？

「……なあラルヴァ、俺が歩いた道はお前を変えてしまう程のモノだったのか」

「——ああ。女神とその眷属を討つ事よりも、僕はキミが自分の道に何を見出すのかが気になったんだ。

それ以外は当たり前の、ありきたりな結末だったし。贅となったキミは、その後も根性でアイツを永遠に封印したんだからね」

……アイツとは誰なのか気になるけれど、今はいい。

「さて、長くなつたけれどその石碑にもう一度触れればキミは二つ目の記憶を思い出す。

覚悟は……問うまでも無かつたかな」

「ああ、行くよ」

決意を胸にして。石碑にそつと触れた。

見えたのは。蒼い月とそれに照らされる青い獅子。

そして、酷く懐かしい匂いだった。

彼が闇に包まれる。また記憶を思い出しているのだろう。

シエズは、小さく息を吐いた。さすがに色々と言われれば、混乱はしてくる。

「……おや、思っていたより戸惑っていないね」

「戸惑ってるわよ、けど別に。事実は事実でしょ。やつと受け入れられる余裕が出てきただけ」

傭兵としての生き方は、あまり考えすぎない事。気にしない事。さすがに相方や仲間が命を賭ける様な生き方をしていれば止めこそするが、それ以外は気にせず気にならずが彼女と言う人間だった。

その生き様に、ベレスは少しだけ微笑んで。

「……強いね、キミは」

「何か、貴方に言われるとむず痒いものがあるわね……」

「……まあ、不思議なものよな。儂とお主、互いに相容れぬ、会えば殺し合うと思っておったが、まさか協力関係になるとはの」

「それは僕もびつくりだよ。不思議なものだね、人間の縁は。遙か過去の因縁さえ、こうまで変えてしまうんだから」

確かに、とベレスは頷いた。

最初こそラルヴァを警戒はしていたが、実際のところそこまでの必要は無いと感じたのだ。

もしかすると、この地から彼を生かして返してくれる鍵はこの人物にあるのかもしれないから。

「……この気配……来るぞ」

武器を構える。

霧から現れたのは一人の少女の成れの果て。残酷な決意の末路。

黒き人ならざる巨体、されどその顔には見覚えがあった。

「あれは……私……？」

蒼月の記憶 1

——ふと、目を覚ます。

目頭が重い。少しばかり長く寝すぎてしまったようだった。

天井は見覚えのある模様。ルミール村の民家で、世話になっている最中だと理解する。

「……」

長い夢を、見ていたような気がする。

とても長く苦しくて、けれども確かに光はあったと思えるような悲しい夢を。

「……ん」

ふと人の気配を感じてみると、ベレス先生が立っていた。

いつもは何えない筈の表情がどこか酷く懐かし気に見える。古い写真を見ているようだった。

「ウイル……」

「珍しいな、ベレスが先に起きているなんて」

「……………」

そつと服を掴まれる。

どこか、いつもと様子が違う。何と云うか細かい事を気にしない彼女にはして、不安を隠せない顔。

何かあつたのだろうか。

「今度は、どこにも行かないで」

「……………? 分かつているけど」

話がうまくかみ合わない。

彼女も悪い夢でも、見たのだろうか。

「おう二人とも起きてたか、そいつは良かった。

出立だ、出るぞ。——ん、ウィルお前何か変わったか?」

「? そんな事は無いと思うけど」

「……………まあそうだよな。変な話しちまってすまん」

ベレス先生もジェラルトもどうしたんだろう。

……………つてここ、遭遇戦イベントだったか。ならまずは戦いを乗り切らねば。

戦いは瞬く間に終わった。槍を使い、盗賊を蹴散らした。

こう見えてもジェラルト傭兵団の一員なのだ。そこそこの腕が無ければ務まらない。流れるように大修道院へ向かい、あつという間にベレス先生が学級を選ぶ場面となりつつあった。無論、俺が口を挟む暇はほぼ無い。

「青獅子の学級を」

「分かりました、デイミトリが級長を務める学級ですね」

「そして彼を青獅子の学級の生徒で」

え、俺選択権なしですか。

いやまあ、ベレス先生が行く学級なら着いていくけど。

何より死にたくないし。

あれよあれよと言う間に、どんどん話が進んでいく。

——実際、話の目的はジェラルトとレア様、そして教員となるベレス先生なのだから。俺の優先度はそりや下がる事だろう。

「……おいウィル、少し話が長くなりそうだから先に顔合わせでもしてきたらどうだ」

ジェラルドの言葉に頷く。何かベレス先生も、今度の課題の事とか話し込んでるから結構長くなりそうだこれ。

部屋を出る直前に頭を下げて、記憶任せの勘で青獅子の学級を目指す。

「確か、真ん中あたりにあったよな……」

見えた見えた。青がトレードマークの旗。入ると鉄や木材の香りが漂う。埃っぽさは無く、気品を感じるソレはまるで王族が使う一品のようだ。

デイミトリを中心に、生徒達が何か話している。

「ふむ、貴方だけか？」

「ベレス先生は後から。話が長くなりそうだから、俺だけ先に挨拶って感じですよ」

級長のデイミトリに軽く会釈する。王族相手に不敬だと言われかねないと、した後で気づいた。その時はその時だ。

「——おい、猪。この傭兵、は」

「……ああ、面影がある。俺とて初めて会った時は動揺を隠せなかった」

デイミトリと初めて会った時か。珍しく彼が表情を崩す一面が見られたと思ったのだ。

けれど、学級生達の一部はそれと同じ眼をしている。

「マジかよ、生きてたのか……」

「待て、彼には記憶がない。あれこれ一度に聞いても、負担になるだけだ」

デイミトリは一步前に出て、俺を見る。

身長高いなあ……俺が僅かに見上げる感じだ。

「改めて、青獅子の学級へようこそウィル。俺達は貴方を歓迎しよう。

——そしてどうか、記憶を取り戻す助力をさせて欲しい」

「……心当たりが？」

「ああ。貴方は……俺達のかつての友にどこか似ているんだ。こう、言葉では具体的に難しいが。

でも、心の何処かで貴方がその友であると確信している」

……随分直球に踏み込んできたな、と思った。

俺の過去が無いのは確かだ。けれど、それらを俺に言う必要は無い。やろうと思えば、彼らだけで意見も交えられた筈。

だからこれは、彼らなりの誠意なのだろう。

会ったばかりの人物に向けるには、余りにも眩しすぎるけど。

「もし、俺が。その友で無かった時は」

「新たな友人となるだけだ。突き放したりなどするものか。俺達が勝手に思い込み勝手に落ち込んだとも思ってくれ」

「……ええと、こういう時なんて返事するべきか分からないですけど。

「こちらこそ、よろしく願います」

なんだかちよつと気恥ずかしくて。

少し目を逸らした。

「よし、ならば訓練所に行こう。既に予約はとつてある」

「殿下、お怪我だけはされぬようお願いします」

「待て、猪。俺が先だ」

「フェリクス、たまには俺に譲ってくれてもいいんじゃないか」

「とりあえず、自己紹介は皆で向かいながらでいいかな……」

「怪我しないようにね。アタシとメーチェがいるから手当はしてあげる」

「あらあらあら、皆元気ね〜」

ワイワイと、進む皆と共に訓練所への道を往く。

ふと、誰かが袖を掴まんでいる事に気付いた。

振り返ると、長い金髪の少女が一人。確か、彼女は――。

「貴方、は」

鈍い頭痛と眩暈が走る。

走馬灯のように脳裏を駆けるは血と死体。

「あの……大丈夫ですか？」

「ああ、うん大丈夫。貴方は」

「イングリットと申します。……私を、覚えていますか」

重く何かが響いて、さらに頭痛が酷くなった。

覚えているような、そうでないような。けれど、忘れてはならないような過ちをしてしまったかのような。

「いえ、変な事を聞いてすみません。……私も、記憶を取り戻す手伝いをさせて貰いますので、どうか」

——悲しげな横顔が、酷く瞼の裏に焼き付いた。

訓練所は日差しが差しており、十分な明るさがある。

まだここぞとばかりに通う生徒はいないらしく、青獅子の学級の貸し切り状態でもあった。

「さあ、武器を取れ。刃を交えれば分かる事もあるだろう」
フェリクスが持っているのは、訓練用の剣。

多分俺も剣を選ぶのが普通なんだろうけど、どうしてか。彼らの前に剣を以て立ちたくは無かった。

手にしたのは、一本の訓練用の槍。刃であろう部分は石突のようになっていて、白布で覆われている。何度か掌で回すようにして感覚を確かめる。

ジエラルトからの教えは何とか活かそうだったのは幸い。

「お願いします、と言おうとして見ると。フェリクスは小さく息を吐いていた。そういう所も、酷く似ているな……。いや、すまん忘れろ。ただの独り言だ」
「ええ、そういう事に」

審判役のドウドウが手を下ろすと同時に、フェリクスが先手を取ってくる。

振り下ろされる上段。棒を回転させ、弾くとその反動を利用しての横薙ぎ。受け流すようにして、その連撃も逸らす。

早くて正確かつ、力も相応。けれど対応出来ぬ相手では無かった。

ただ怪我させる訳にも行かない。何せ今日は入学初日。変な噂とて立てたくないのである。

打ち合いにして十分程。確かにフェリクスは強い。そこらの盗賊なら一蹴してしま
う程の腕前である。

けれどこちらとて、ジエラルト傭兵団の技を習っているのだ。負ける理由などある筈
もない。

「そこまでだ。それ以上は手傷となる」

ドウドウの言葉に得物を下ろす。

身体の緊張をほぐすように小さく息を吐いた。

うおおお、と言わんばかりに人が集う。

「凄いね、ウイル。フェリクスと互角に打ち合うなんて！」

「綺麗な槍捌きでしたね！ それでいて型に捕らわれない自由な動き……凄かった！」
アネットとアッシュを先頭に。青獅子の生徒達が次々と集まってくる。

マジか、自分でそんなつもり無いのに。傍から見るとそれ程か。

「皆、そこまでだ。まだ入学初日だぞ、ウイルが困るだろう。——すまなかつたな」
「大丈夫です、寧ろ受け入れて貰えて有難いと言うか何と言うか……」

引かれてたらどうしようとは、ちよつと思つてました。

「さあ、ウイル。運動の後は腹ごしらえ。つまりは食堂だ。ここの料理は絶品だぞ」

……あれ、デIMITリつて確か味覚が……。いや、まあそんな事今はいいか。

また彼らと話しながら、食堂へ向かう。

中はまだ人こそそんなにいないが、授業が始まれば本格的に生徒達で溢れるのだろう。

「ウイル君は、味の好みとかあるのかしら〜」

「えーと……ブルゼンとかキジのローストとかですかね。何て言いますか、舌に合うつて言うかそつちの方が好みと言いますか。

どうにも、高級食材とかは口に合わなくて」

高ければ美味しい、なんて人によるのである。

ブルゼンは焼き菓子だが、ジェラルト曰く俺が言う事を聞かない時はブルゼンを上げると効果があつたらしい。単純すぎないか。

「あらあら、ファーガスは貴方にとって故郷の味だったりして」

「……………」

「ブルゼンは王国名物の焼き菓子なんだ、傭兵にも人気があつたなんて知らなかつたよ」
「そうなのか……。確かにファーガス方面の仕事の時結構貰つてたっけ」

——もしかすると、デイミトリ達の予感は当たっているのかもしれない。

俺は彼らと共に幼少期を過ごした。

ならばどうして俺はそれを覚えておらず。傭兵として拾われる事になつたのか。

きつとそれらと向き合う道になる。

培つた予感が、そう告げていた。

「あの……ウイル。良かったら、私も同じ物を頼んでも良いでしょうか……？」

「同じ物つて言うか、食べたい物を皆が頼む方が……」

「私が、そうしたいのです。ただ貴方が、その、気になるかな……と」

「イングリットはアンタと同じ物を食べたい、だつてさウイル」

「シルヴァン……！」

皆で食卓を囲み、フアーガスのお話を聞く日となった。

……何だが、とても大事な事を忘れているような……。

その夜、与えられた部屋に戻ると内部には不機嫌な女性が一人。

「……」

「……すみませんでした」

あの後戻ってくるだろうと思い、与えられた部屋で俺を待ち続けていたベレス先生。けど俺は戻る事無く、日が暮れるまで生徒達と話していたから彼女一人待ちぼうけとなる羽目になった。

「何だか、楽しそうだったと聞いた」

「……うん、まあ」

ベレス先生と生徒達があいさつした時、イングリット凄く複雑な目をしてたよなあ……。

いや、うん彼女目が醒める程の美人だからそんな反応になるのも分からなくない。

部屋に持ち込んだ傭兵時代の荷物を解く。ベレス先生も手伝ってくれるそうだから、早めに終わりそうだ。

「……………私が、先だから」

蒼月の記憶2

その出会いは偶然だった。

紋章無き子に価値は無い。それが貴族の習い。

そんな風習に何もかも嫌気が差して、気分を晴らすべく領内の盗賊討伐へ向かった。単なる八つ当たりでしかないのは分かっている。そしてその帰りに偶然、木の陰で蹲っている所を見つけたのだ。

『——何で、こんなところにガキがいやがる……？ 人攫いか？』

『……』

背丈で童だと否応なしに気付く。顔を見ればまだ幼さが残っていた。

空虚な瞳の子どもであったが、全身が血塗れで凄絶な場から命からがら生還したという事が嫌でも分かった。

『おい……—ああ、クソ怪我してんのかよお前』

総身が傷だらけであるが、腹部の傷が酷い。このまま放っておけば遠く無い内に死ぬ。

慣れぬ事をしたと、我ながら思う。

自分の在り方すらままならない癖に、目の前の命を救おうとする。

そんなお人よしをしたところで、今更自分の価値が生まれる訳でも無いのに。

『とりあえず掴まれ。あのクソ親父の所まで行くぞ』

けれどどうしてか、悪くないと思ってしまった。

「……今のは」

見覚えのない、けれど懐かしい夢を見た。森の中で誰かに拾われた夢。赤い髪の少年に手を差し伸べられた事。

その少年はどこかシルヴァンに似た顔立ち——。

「……何を忘れてるんだ、俺」

自室の窓から見る空は暗い。明けの光が差し込むまでまだまだ時間がかかる。

けれど、眠気は全く残っていなかった。じっくり休めた、のではなくただ単純に目覚めが悪すぎた。

今日の日付を見る。明後日には課題として、賊の討伐に向かう。——確か原作では……誰と戦ったのか。名前だけが思い出せない。

戦いの最後に彼は英雄の遺産を使おうとして、紋章が無いが故に魔獣化し死亡する。それが■■■■と云う男の運命。世界に、定めに抗おうとした彼に与えられた余りにも無惨な末路だった。

「……………」

軽い吐き気と眩暈がこみ上げて思い出そうとするのを中止する。

マヌエラ先生から処方された吐き気止めを口の中に放り込んだ。

少し時間が経てば、症状も落ち着いてくる。揺れていた世界が少しずつではあるが治まっていく。

「……………よし」

記憶こそ無いが、俺がいる時点で既に俺の知るこの世界とはかなり異なっている。デIMITリは悪夢こそ見るようだが、まだ味覚は残っており幻覚までは見えていない。ダスカーの悲劇こそ起きたものの、ダスカー人の評価はそこまで落ちていない。どうやら先代—デIMITリの父—が彼らへの噂は誤解であるとしつかり説いていたのが効いているようだった。

ならば、きつと。本来救えなかった誰かをこの世界では救えるのではないだろうか。フオドラに生きる一人として、出来る事をしたい。自分と言う命が生きている意味を為したい。自分の意志を、自分の為に使うのだ。

青獅子の学級の一人として、相応しい人物であるように。

「走り込み、行くか」

どうにも体が落ち着かない。幸い授業までまだまだ時間はある。

士官学生服に着替えて、万が一のために訓練用の槍を背中に。これが思いのほか中々な重さである。

ドアを出て、鍵をかける。それでもしておかないと、稀に侵入者が来るのである。この前はベレス先生がいて、訳が分からなかった。何でも補習とか何とかだったらしい。別に教室で良くないですか……？

ちなみにその前はイングリットだった。部屋の掃除とかで来てた。すつごく綺麗にしてくれた。その後は食堂と一緒に夕食食べました。美味しかったです。

……薬を見つからない場所に隠すのは中々に骨が折れた。

「よし、夜明けまで走るかあ」

体をほぐしながら、外へ。

こんな時間でも、商品や食材の仕入れで人は動いていた。彼らのおかげで俺達士官学生は確かな日々を送れている。

彼らに頭を下げながら、門の外へ。

大修道院の周辺は、結構入り組んだ地形になっていて外周を走ろうとすると中々にキ

ツイ。ちよつとしたアスレチックだ。

入念に準備運動を行つてから、軽くジョギングのようなペースで。

自然の中を走るのは嫌いじゃないし、フォドラの風は心地よい。夜明けなら猶更だつた。

「……ウイルじゃないか」

「デイミトリ？」

何故か、既にデイミトリが走り込んでいた。そこそこ汗も見られるし、前々から走つていたようだ。

「奇遇だな、早めに目が醒めたのか」

「全くの偶然ですね」

彼と一緒に走り込みを行う。どうやら昔から鍛えられているようで、相当な疲労はあつる筈なのに、全くそれを顔に出さない。

「……入つてからの数日はすまなかつたな。お前の境遇を無視するような事ばかりで」

「？ ……ああ、似ているとか言う件ですか」

「ドウドウーから咎められてな。独り善がりになつてしまつていた。……お前からすれば、馴れ馴れしいと思われても仕方がない」

「気にしてないですよ、寧ろ受け入れて貰えてる事が分かつたので有難かつたです」

「……そうか、そう言つて貰えて有難い」

時々言葉を交え、少ししては無言となり、またどこかで言葉を交わす。

ふと気になって、けれど僅かに迷う。それは聞いてもいいのだろうか。

「どうした、何か聞きたげな様子だが」

「え、何で分かるんですか」

「いや、意外と分かるぞ。ジェラルト殿も、そう仰つていた。かなり顔に出ると」

「……ええ」

「他人から見た自分は意外と分からないモノさ」

ジェラルト、やつぱり結構見てくれてたんだなあ。ベレス先生との会話も、言葉数こそ少ないけどちゃんと意志は伝わってるし。あの人はぶつきらぼうではあるが、しっかり内面を見てくれる人だと思う。

……色々躊躇するよりも、いつそ踏み込んで聞いてみるか。

「先代は、どんな方でしたか」

デイミトリの父。彼がどんな人物だったのか少しだけ興味がある。

それを知らないままにしておくのは自分の何処かが許せなかつたから。

「……父上、か。俺にとつて、永遠に追いつけない理想そのものだ。確かに政治としては敵を多く作つていたかもしれないが、それでも大地を愛し、民の幸福を考え、心の底か

ら平穩を願っていた。

——そして、もし。もしもあの時父上と言葉を交わす機会が無ければ、俺は自分の妄執に囚われていただろうな」

「……」

「彼がいなければ、俺は目の前で父の首が跳ぶ瞬間を見ただろう。……だからこそ、彼には深く感謝している。

でも、同時にこうも思った。俺がもつと強ければ、共に帰れたのではないかと」

デIMITリは、僅かな憎しみが籠ったような息を吐いた。その視線は、遠いどこかを見ているようで。

ならば彼が許せないのは、刺客ではなくあの場にながら何も為せなかつた——

「だからこそあの槍に、そして自分自身に誓った。何も奪わせない、国も民も、そして友も。全てを守り抜くと。

きつとここなら、この大修道院なら僅かだろうが近づける。

父上は俺にとって理想であり、未来であり、誓いでもある」

そう語るデIMITリの目は濁っておらず。瞳には確かな光を宿していた。

彼は自分の意志で己の道を決めたのだ。

「……そうだったんですね」

「ああ、すまないな。少しばかり長くなってしまった。残りで一周して終わるとするか」
「はい」

ちなみにその後、朝の教室でドウドウやシルヴァン、イングリット、フェリクスから『走るならもう少し温かくなってからにしろ、風邪を引いたらどうする』とデイミトリ共々説教を受けた。

そしてベレス先生やジェラルトには俺だけが説教だった解せぬ。

それから二日後、課題を果たすべく青獅子は遠征をおこなっていた。

馬を走らせ、森を歩き凡そ半日ほどで目的地である塔に到着する。

「……」

「ええ、倒すべき賊が根城にしていると言う……。少々、手を焼きそうですな」

ギルベルトさんの言葉と共に塔を見上げた。

その瞬間僅かに眩暈を感じて、眉間を抑える。

近頃、デイミトリ達とよく話すように訓練を重ねる事も多くなった。

——そしてそれと比例するように、覚えのない記憶が過ぎつたり夢を見る事も増えてきた。

誰かと共に刃を交え研鑽を行う夢。誰かから大切な事を教えて貰う夢。誰かと未来を語り合う夢。

覚えてない事が気持ち悪くて、申し訳なくて。酷く泣きたくなってしまう。

「ウイル……?」

「ああ、いや大丈夫だベレス先生。確か、ここを根城にしてる賊の討伐、だったつけ」

「うん、その通り。……大丈夫、ウイル?」

「戦場でヘマはしない。ジェラルトに小言貰ってしまうし」

背中に携えた槍と、腰に差した剣を見る。

槍は元々使っていたけれど、フェリクスから剣も強く勧められたのだ。槍だけに絞るのは勿体ないと。

槍と剣を同時に使う、なんて本当に物珍しいとは思いますがそれでも不思議と体は慣れていくのである。

ジェラルトと模擬戦をして、決定打こそ決めきれなかったが負けはしなかったのはい方だろう。『曲芸でもやるつもりか』と笑われたのは、さすがに納得できなかったが。

「……王国出身と言うのは初めて聞いた」

「出身かは分からないけど、過ごしてた時期があるのは間違いないと思う。時々さ、見覚えのない光景が過ぎって、懐かしくなる時があるし」

「……そう。——ならあの時のここは、もしかするとキミにとって……」

「……?」

俯いた彼女の表情は伺えない。

何か思い当たる事があるのだろうか。

「先生、ウイル。まもなく目的地だ。もう一度作戦や陣形を確認しておきたい」

「分かりました。ほら、行こうベレス」

「……分かった」

塔の中には、盗賊達が陣形を組んで待ち構えていた。

兵士達の練度こそ普通ではあるものの、陣形は兵法のお手本とも言える程に整っている。

「……さすが兄上。抜かりはない、か。楽しませては貰え無さそうだな」

「兄上……?」

シルヴァンの響きにどこか感じるモノがあつて、思わずそう呟いてしまった。

俺の言葉にシルヴァンは僅かに迷ったような素振りの顔。そして小さく息を吐いた。

「ああ、マイクラン。俺の兄上であり、紋章が無かつた故に選ばれなかつた男。そして

ウィル、お前を拾ってきたその人だよ。アイツがいなけりや、俺達はお前と出会って
なかつたんだ」

「――」

脳裏に過ぎつたのは、誰かに背負われてる光景。それから多くの人達に出会った事。
いつも感じる筈の頭痛が、猶更酷い。

後一つ、後一つ何かを掴めれば思い出せそうな感覚が酷くもどかしい。

持っていた槍を頭上で回し、上から狙撃を狙った矢を弾く。

「流石。……まだ、思い出せないか？」

「……後、少しなんだ。何か掴みかけてるのは、ある」

――彼らの言葉が無かつたら心の迷いだと言つて切り捨てていたかもしれない。

今はとにかく前へ。その先にきつとあの人はいるだろうから。

「まずは会う。会つてから、その時に考える」

「そうか、なら安心だ。行こうぜウィル」

大盾と斧を持った賊――俺の槍が届く間合い三つ分の所で、槍を頭部目がけて投擲。
それを防ごうと盾を持ち上げるようにして構えた。

その下、がら空きになった部分を滑り込むようにして抜けて足首、腰、両肩背面を瞬
時に打ち付ける。刃を落としているため殺す事は無いが、それでも十分な威力だろう。

体が崩れ落ちる音。それを聞き届けると同時に前へ走る。

賊を次々と倒して奥へ、奥へ。胸が掻き立てられる。会うべき人がいるのだと、本能が理解する。

階段を駆け上がると、英雄の遺産である破裂の槍を抱えた男が一人。

「……士官学校にいて話した本当だったか」

「マイ、クラン……さん」

シルヴァンと同じ赤髪。そして酷く懐かしさを覚える顔。

——脳裏に過ぎる、光景の数々。誰かと語り、剣を交え、未来を語る。そんな日々の繰り返し。

それは朧気などではなく、明確だった。

「森の中で、俺を拾って……屋敷まで」

「そうだ。覚えてるじゃねえか、忘れてるようならそのまま何も言わなくて済んだんだけどよ」

彼は立ちあがり、俺の方へ歩いてくる。

半ばで足は止まり、手が差し出された。鎧は錆びて剥がれ、あちこちが傷ついていた。「俺の所に来い、ウィル。お前にはその資格がある。この世界を、世の在り方を憎んで何もかも壊してやる資格がよ」

彼は紋章を持たなかった。しかしそれで継承権を失つても尚、俺の面倒を見てくれた事は覚えてゐる。

そして俺が先代の警護に選ばれたと言う時に、ゴードエイ伯と口論になつてそのまま家を飛び出していき、廃嫡になつた。

どうして、忘れてなどいられたのだろうか。

俺にとつて、この人は文字通り引き上げてくれた存在だつた。

——だからこそ、答えはもう決まつている。

「この世界を壊すと言うのなら、俺はその手を取れません」

「……何故だ、お前は捨てられた側だろう。恨んだ事は、憎んだ事はねえのか」

確かに捨てられたのかもしれない。思い出せたのは、彼に拾われた以降の事まで。血塗れだったから、もしかすると惨い目にあつたのかもしれない。残酷な光景を見たのかもしれない。それこそ、地獄と呼ぶに相応しい出来事があつたのかもしれない。

不幸な過去があつたのは違ひない。

でも、全てがそうだつたのではない。楽しかつたのだ。屋敷で過ごした日々も、傭兵団で明日すら分らない日々で生きるのも。

一人ではなかつたから。

「それよりも大事なモノが出来ました。二度と失いたくないと思う程に、大切なモノが」

「……」

「だから止めます。そして貴方も救います。

それが今の俺が果たすべき事です」

剣と槍が交差する。

彼の瞳はどこまでも本気だった。

「そうか、なら後悔させてやるぜウイル」

「（こちらこそ、意地でも貴方を連れていきます）」

背後へ跳ぶ。立っていた場所に矢が刺さる。

我ながら深入りしすぎており、孤立していたと思い出す。

後で、ベレス先生からの説教とデイミトリ達からの小言は待ったなしだろう。

「ウイル！ 気持ち分かるが前に出過ぎだ！」

「すいません、色々と焦りがあって。

……殿下、ようやく思い出しました。貴方達との日々を。かつて王国で過ごした毎日
を」

俺の言葉に、デイミトリは目を丸くした。

もう、忘れない。俺は王国の人間だ。王国に拾われ、王国で育ち、王国で生きたのだ。

「そうか、そうか……！ マイクランとは、戦えるか？」

「ええ、戦わせてください。ぶつかり合わないと分からない事だつてあるでしょう」
「……分かった、周囲は任せておけ。無理はするなよ」

剣に迷いはない。

まずは英雄の遺産を弾かせて、手を放させる。そこから殴り合い。

あの人を、犠牲にしたくはない。

「っ！」

放たれる刺突を剣の腹で逸らす。

そのまま穂先を受け流し、一気に肉薄し——すぐさま距離を取った。

「……やるじゃねえか。見抜かれてたか」

「貴方なら、懐刀ぐらいいは用意するでしょう。この布陣を敷ける人なんですから」

頬を掠めたのは、彼が懐にしまい込んでいたナイフ。

この人が慣れない武器に命全てを預ける筈が無い。

だからこそ、そこに勝機はある。

「！」

怒涛の連撃で一気に押し切る。体に息を吐く暇すら与えない。

槍へ、とにかく槍へ強い一撃を与え続け手を放させる。

武器が欠けた感触——だが、まだ持つ。

「ナメンじゃつ、ねえぞおッ！」

その斬撃を逸らし或いは受けながら、それでも彼は執念を手放さなかった。範囲から逃れる体に追いつがる。

いつ、どこで英雄の遺産が暴走を開始するか分からない。故に食らいつくかのような勢いのまま、攻め続ける。

見えたのは再度の刺突。けれど、腕の筋肉が引き絞られた所を見るとそれは全力の一撃であった。

「！」

繰り出された槍の先端を、足で踏みつけ穂先を地面へ。一気に距離を詰めようとして、迫る短刀。それを欠けた剣で弾く。

そのまま彼の胸倉を掴んで——思いつきり頭突きを叩き込んだ。思わず俺まで意識が明転する程の衝撃で。

一撃を受け、マイクランさんは両膝を着いた。意識を失わなかったのは、彼の精神力の賜物か。

「……今のは、効いたぜ」

「そりゃ、全部込めましたから」

俺からマイクランさんへの感情は言葉だけで表現しきれない。拾われた恩、救われた

記憶——今の俺があるのは、この人のおかげと言っても過言では無いから。

「なあ、何でだ」

「何がです」

「どうして俺を救おうとした。殺そうと思えば殺せただろ……？ 紋章を持たねえヤツなんて、何の価値もねえって言うのによ」

「……それでも」

「あん？」

「それでも、貴方に生きてて欲しいからです。例え紋章が無くても、貴方は貴方の生きた証を残せる。それだけの人だって、信じてます」

「……そうかよ」

マイクランさんは、何か憑き物が取れたかのように小さく笑って——俺を突き飛ばした。

「——え」

直後、彼の体がどこからか現れた泥に飲み込まれていく。

脳裏に過ぎたのは英雄の遺産。だが、あれは既に手元のない筈だった。

思考が疑問を埋め尽くそうとして、横から再度飛来した炎が泥を焼き尽くす。

「ウイル！」

「無事か、まずは下がるぞー！」

駆け付けてくれたデイミトリの手を取り、立ち上がる。

幸い追撃こそ無かったが、聞こえたのは獣のような雄叫び。

「……なんだ、アレは」

デイミトリの口から零れた疑問は、その場のほぼ全員が同じ物である。

マイクランさんを呑み込んだ泥は、肥大化し巨大な獣へと姿を変えた。

——ズキンと、頭が痛む。同じ光景をどこかで見たような覚えがあったが、それに思考を割く余裕はない。

「ウイル、無事？ 怪我は？」

「ありがとう、今のところは」

ベレス先生の回復に、軽く頭を下げる。

傷こそないけれど、気分が少しだけ和らいだのは有難い。

「……どうする、先生。あれはさすがに骨が折れそうぞ」

「大丈夫、魔獣との戦闘経験もある。安心して」

「それは頼もしいな」

？ 傭兵団で魔獣と戦った事あったっけ……。ジェラルトから聞いたのだろうか。

「ウイル、焦るなよ。俺とて助きたい気持ちは同じだ。一人で突っ走ろうとするな」

デIMITORIから差し出された剣を受け取る。マイクランさんとの戦いで使ったものは既に半ばから折れており、使い物にならない。

今度の剣は刃が潰されていない真剣そのもの。これでなければ、今の俺は魔獣に対抗すら出来ない。

「……分かつてます」

剣を構える。

——魔獣は普通に倒してしまえば本人も死に至る。

ならば魔獣の核となっているモノを破壊するのではなく、抜き取るしかない。多分、こんな無謀をやろうとしているのは俺だけだ。

あの魔獣の猛攻を掻い潜り、偶然にも生まれた隙を見出し、叶うかすらも怪しい奇跡に賭ける。

「……行きます」

ベレス先生の号令と共に剣を払い、魔獣目がけて駆けだした。

戦いは熾烈を極めた。

魔獣の腕が一步振るわれる度に、地面ごと碎け散る。足場が無ければ、思うように動

くのは困難であり、状況は守勢に傾きつつあった。

けれど、誰一人として諦めるような心積もりは微塵もない。

「っ！」

先ほどまで頭があった所を、巨軀が掠めていく。その背面へ斬撃を一つ。

これでいくつかの核は破壊した筈。

「……………」

魔獣が一際強く吠えた。——与えた一刀は致命傷には程遠い。

ならば何故、と考える前に本能が離脱する事を叫んだ。

瞬間、魔獣の体が溶けだす。巨軀が罅割れて、煮詰めたような泥が割れ目から溶け出

していく。

「離れろー！」

各々が距離を取る。一番、間合いが近いのは俺だけだ。

それを知ってか、行く手を真横から飛来した泥が遮る。

動きを止めた瞬間、右手と右足へ触手らしきモノが巻き付いた。持っていた剣は、それらに奪われて手元から去ってしまっている。

「なっ……………」

そのまま一気に中心部へと引きずり込まれた。

まるで彫刻像のように蠢く泥の塊に、巻き付いた箇所が飲み込まれていく。呑まれた箇所は、焼けた鉄のように熱い。全身に取り込まれると死ぬ、と否応なしに分かった。

抵抗するべく、手を動かすと何かが触れた。——何かの柄のよう。無我夢中で、それを強く掴む。

「——！」

脳裏に流れ込んでくる知らない記憶。誰か達と共に過ごした事、そこが襲撃を受けたのか血と死体で溢れた事。

無念、憎悪、報復。そんな感情が一度にあふれ出してきて——。

「知った事かよー！」

今はそんなの後回しだ。

ここで止まっては行られない。まだ何も成し得てない。この世界に生まれて、生きて意味を一つとて残せていない。

ならば俺は何のためにここににいるのか。

「救うため、助ける為だ……！」

全身を襲う激痛。まるで拒絶するかのようなソレは電撃のよう。何を意味するのかなんて、分かっている。紋章を持たぬ者には英雄の遺産は使えない。使えば、どうあれ死に至る。

でも迷う理由にはならない。なる訳が無い。

力を。誰かを助けるための力を。

自分の意志を、貫き通す力を。

「力を貸せエエツ!!!」

灼ける様な痛みと共に、破裂の槍を引き抜いた。

そのまま槍を回し、手足を拘束していた触手を即座に斬り捨てる。

間髪入れずに、恐らくは核であろう場所へ。俺を取り込もうとしていた中心部へ、

残った力を振り絞って斬撃を叩き込む。

「ちいっ……っ……」

触手が手足へと巻き付く。それと共にさらに強くなる焼けるような痛み。

けれど止めてしまえば、そこで終わり。

だから纏わりつくそれらを全て無視した。

両手での斬り上げ——その一撃で微かに奥から人の体のようなモノが見えた。

槍を、さらに強く握りしめる。

「!!!」

言葉にならぬ雄叫びと共に、力強く振り下ろした一閃。

ありったけの力を全て込めたその一刀で、触手も泥も全てが動きを止めた。

まるで灰のように朽ちていき、砕け散っていく。

「……………あ」

見えたのは赤い髪——マイクランさんが地面に倒れ込もうとして、それを受け止める。

生憎、肩を貸して歩く程の力はもう残っていない。

意識が遠のく。誰かに体を支えられた事だけが、その刹那に残っていた。

「ウイルっ！ おい、死ぬな！」

「すぐ治療を……………！」

「……………！」

目が醒める。見えたのは天井、覚えのある香り。

士官学校の医務室だった。

「よう、目が醒めたか。思ってたより回復が早いな。ここに運び込まれてからまだ二日だぞ。予想なら後一日は寝ていると思ってたんだがよ」

「ジェラルト……………」

寝かされていたベッドの傍にはジェラルトが立っていた。

「どこまで覚えてる?」

「……マイクランさんを、助けた所まで」

「そうか……。手短に言うぞ。マイクランは命こそ取り留めた。既に大修道院の牢屋に押し込まれてる。動けて喋れてメシも自分で食えるぐらいには元気だそうだ」

「……もしかして、処刑されるのか」

「可能性はあったがな、ただベレスとギルベルト。加えてお前らの生徒から嘆願があつてよ。処刑だけは免れそうだ。全くレア様もアイツには甘え」

「……」

良かった、助けた意味が無くなるどころだった。

「ウィル、お前体に違和感はないか。何か今までと変わった所は」
体を動かしてみる。特に感じる所は無い。

今まで通り、いつも通りだ。

「生徒達から聞いたぞ。……英雄の遺産を使ったらしいな」

「……」

「あんまり大つぴらに言えねえがよ、アレには絶対手を出すな。ロクな事にならないのは目に見える」

「分かつてる」

使った時間が少なかったからか、或いは何か特別な事情があるのか。

アレは本来、ゴードイ工家の正当な後継が使うべき代物だ。俺なんぞが使つていい理由なんてある筈が無い。

「それとよ、もう一つ聞いた。お前、いくつか記憶が戻つたらしいな。何でも王国で過ごしてた頃だとか」

「……うん」

「良かったじゃねえか、もう一つ進路が出来てよ」

もう一つ？

「王国に仕えるって事だ。ベレスが嫉妬するぐらい、連中とは仲が良いらしいじゃねえか。中でも槍使つてる嬢ちゃんは特にな」

え、ベレス先生嫉妬してたの？ マジ……？

だから道理で最近謎の圧を感じてたのか。

「真つ当に生きられる機会があるならそれに越したことはねえ。傭兵団なんて、まあ俺が言える事じゃないが、いっどうなるか分からねえ仕事だ。」

……出来る事ならベレス共々、穏やかに生きて欲しかったが」

確かに傭兵団にいた時も、昨日話していた人が次の日戦死したなんて当たり前の事だ。

でも、それを寂しいと感じた事はあれど卑下するつもりはない。

「なら探すよ、その選択に見合う理由を、生きる訳を。」

俺が俺として為すべき事を」

「そうか……。お前が自分で決めたなら、それでいいさ。しつかり迷って、悩んで決めた。人生何があるか分からないが、その生が一度きりなのは変わらねえからよ」

じゃあ俺はレア様に報告してくるから今日は戻って休め、と言いつつ残してジェラルトは部屋を出ていった。

時刻は夕方だろうか。既に日が落ちようとしている空が窓から見える。

向かうべき場所なんて、とつづくに決まっている。

帰ろう、皆の所へ。